二月興行

文楽人浄瑠璃

文楽座

四ツ橋

一部金十五錢

早春二月を迎へて皆様の御健康のお慶んなことをお欣び申上げます、當二月興行文樂座人形淨瑠璃は一座總出演の本格陣と臻し、上演番組も選擇を重ね、まづ初役とも謂つべき紋下津太夫の「堀川」に土佐太夫が極め附十八番の「先代」更に古靱太夫は、實に珍らしき二十餘年振で復活上演を見たる妹脊の「質店」を初役に熱演いたしますれば若手連の掛合また潑剌と、花に魁けたる舞臺の華の滿開に御座います、鄕土藝術保存の高唱さるゝとき是非御來聽御觀覽下さいますやうお希ひ申上げます。

昭和八年二月一日

文樂座

昭和八年二月一日初日

初　日午後二時開幕
二日目より午後三時開幕

・御觀覽料・

一等椅子席御一名　金三圓
二等席御一名　金一圓五十錢
三等席御一名　金八十錢
一等お座席御一名　金三圓五十錢

一等お座席
一等椅子席は五日前より
前賣切符發賣致居候

前賣切符専用電話　南四七一一番
電話南　七四〇八番
三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へカツト廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希ます

あらゆる印刷
永井日英堂印刷所
大阪市西區土佐堀通一丁目
長三四四四九九四
三八〇一四四一
番番番
(44)土佐堀

お知らせ

今度、文樂座の發展と保存を期するために、左の通り絶大の積極的御後援を賚はることになりました、左の方々の御厚情は申すまでもなく汎く皆様方の御愛顧御支持によることが爰に實現されました次第で御座ゐます、ここに列記の方々へ厚く感謝いたしますと倶に御報告をかねて一層御援助下さいます様お希ひ申上げます。

昭和八年二月

文樂座一同

建議案

鄉土藝術保護奬勵ニ關スル意見書

惟フニ近時物質文明偏重ノ結果國民ノ氣風滔々トシテ輕佻詭激ニ流レ動モスレバ思想界ノ混亂ヲ來サントスルハ洵ニ國家ノ爲メ深憂ニ堪ヘザル所ニシテ方今內外共ニ愈々時局重大ノ秋特ニ深ク思ヒヲ精神文化ノ興隆ニ致シ我大和民族傳統的ノ愛國的氣魄ヲ興起セシメ以テ國運伸張ノ根底ヲ啓培セザルベカラズ而シテ愛國的穩健中正ナル國民思想ヲ啓培スルノ基礎ハ即チ之レヲ鄉土愛ノ喚起ニ俟ツベシト信ズ鄉土愛ノ喚起ノ方途ハ多々アルベシト雖モ就中鄉土藝術ノ普及徹底ニ俟タザルベカラズ而シテ我大阪ニ於ケル鄉土藝術ハ即チ人形淨瑠璃ニシテ這ハ只ニ大阪ニ於ケル鄉土藝術トシテ誇ルニ足ルノミナラズ我日本ニ於ケル最モ高尙ナル古典的藝術トシテ世界ニ誇ルベキモノニシテ是レガ我ガ國民ニ對スル精神的薰化ト情操教育ノ上ニ致シタル効果ハ蓋シ甚大ナルモノアリ、如斯好個ノ精神文化興隆ノ資料タル鄉土藝術ハ宜シク之レヲ保護保存スベキニシテ今若シ之ヲ今日趨勢ニ放置センカ必ズヤ遠カラザル將來ニ於テ全ク衰亡ノ運命ニ逢着スルハ明カナリ依ツテ本府ハ是等鄉土藝術ノ精神文化ニ致セル眞價ヲ認メ速ニ何等カノ方途ヲ講ジ之レヲ保護保存スルト共ニ機會アル毎ニ積極的後援奬勵ヲ加ヘ以テ府民ノ情操教育ノ涵養ト精神文化ノ興隆ニ資セラレンコトヲ望ム

右府縣制第四十四條ニ依リ意見呈出候也

昭和七年十二月　日

大阪府會議長　辻阪信次郎

大阪府知事　縣　忍　殿

右提出候也

昭和七年十二月二十一日

提出者　蒲田利郎　薄　恕一　原田長治

賛成者　中谷虎司　高木正明　深美源吉
淺野藤太郎　富田貞男　中田守雄
長谷了惠　上田伊右衛門　於勢升
土井松三　木村吉太郎　小川英三
小西楯雄　山田銀太郎　大川光三
押谷富三　熊本與市　播磨昌晟
辻本善七　礒村彌右衛門　龜井讓太郎
金野太三郎　栩原豊一　木下清一郎
永田三次郎　乾　正一　末吉平三郎
吉村周次郎　岩崎良三　川端政繁
岩國平次郎　白石梅太郎　片岡秀治
丸橋林藏　春里嘉造　中塚種夫
溝淵春次　近森麒作　石黒榮太郎
木下常吉　田中藤作　名越民次郎
魚森一太郎　辻　利平　黑崎友次郎
齋藤宗隆　小西池秀夫　古藤增次郎

三味線

三味線
大阪西横堀上ル

文樂座人形淨瑠璃

珍らしき上演の名作

二月興行

二日目の豫定時間表

七福神寶の入船（三時より三時三十分まで）
幕間　十分間

伽羅先代萩
竹の間の段（三時四十分より　四時二十五分まで）
御殿の段（四時二十五分より　五時五十分まで）
幕間　二十分間

染模樣妹脊門松
生玉の段（六時十分より　六時三十分まで）
賣店の段（六時三十分より　七時四十分まで）
幕間　十五分間

近頃河原の達引
四條河原の段（七時五十五分より　八時二十分まで）
堀川猿廻しの段（八時二十分より　九時三十五分まで）
幕間　十分間

戀女房染分手綱
重の井子別の段（九時四十五分より十時四十五分まで）

人形芝居について

◇人形芝居發達のこと
◇文樂座なり立のこと
◇人形頭說明のこと

始まつたもので、傀儡子の名は曰に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪郭は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたと御座います。其當時に、四三と云ふのが傀儡を舞はせた事が『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたでせうが、多少の糸が附いて居たかも知れない、と云ふ想像は出來ない事もありません。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いで居たらしう御座いますが、淨土宗の起るに至つて、傀儡子の大方は淨土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたものらしく、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、菩佛薩の本緣や、寺社の緣起、即ち謂ふ所の本地物を語る說經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる樣になりました。之れが人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃といふものも出來た、即ち京都の目貫屋と云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形と此三者が綜合される事に成りまし

たのが、慶長年中、即ち德川の始頃ですが、忽ちにして京では四條五條の如き或は江戸の堺町とか葺屋町とか、櫓が立つて此人形芝居が繁昌したのであります。順序として當然此頃には最う人形の類も增してはゐたのですが、然し舞臺などは固より無く其人形を手首があるばかり、遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖口へ出されて舞されたもので、大阪の石井飛彈掾が始て其手足の工夫もしたものですとか、由來此掾號なるものは人形師の所有なりしを後に淨瑠璃太夫の勢强くこれを專らにするに至つたとの事。さて竹田のから、くり人形が出來たり、野呂松のの、ろま人形が出來たり、次郎三郎が、おやま人形を使つたり、殊には彼の元祿時代になると大阪へ義太夫が現はれて竹本座をはじめ、又近松翁が現はれて此義太夫節のために人形芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書き卸し、かも其人形遣ひとしては辰松八郎兵衛と云ふ名人も出て、今の出遣ひの如きも此人によつて始まつたと云ふのが、始めは此人形を下の幕と上の顏隱し幕の間から出して遣つてゐたので、畢竟人形の動くに隨つて自然遣ひ手の身体も動くこれが見好くないから黑幕の蔭に黑頭巾して遣つてゐたものを、愈々今度八郎兵衛が袴を着け手摺を離れ無

舞の手妻を遣ふに其全身少しも亂るゝ事がないといふ評判を取つたのであります。加之他方また豐竹座の出來るあり、即ち西と東と同じ大阪の地に於て太夫三味線、作者から人形遣ひと全く競爭的に繁昌を來したのですから、從つて其進歩發達は眼覺しいものがあり、道具建から人形衣裳總ては美々しく立派やかを盡し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら山簾を本山の張ぬきにするやら、太夫も出語りをするやら、例へば人形にしてからが先づ眼が動き、指先が動き、享保の末には竹本座『大內鑑』の與勘平彌勘平が腹をふくらまし、元文になると豐竹座『武烈天皇

艤』の佐手彦の眉を動かしはじめるなど、非常に發達を遂たのであります。卽ち言を換れば當時名人の遣ひ手が蜚出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の『國性爺後日合戦』に初出勤錦舍の出遣ひに片手の晴業を示して以來といふものは實に此人形については工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐれば『夏祭』の人形に始て帷子衣裳を着せるとか、或は其遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子、黑繻子の前帶淺黃の綿帽子を着けさせた如き、今なほ歌舞伎で眞似てる所事實此時代といふものは操盛んを極めて歌舞伎はあれど無いも同然、幟は林立して其鼎負は凄まじい有樣であつたと云ひます、江戸とて矢張之と同じく、慶長の昔薩摩淨雲が淡路の人形舞しと此人形芝居を始めて以來、各派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐたのですが、享保に一端大阪の義太夫芝居が入つて來てからと云ふものは又漸次に其勢力範圍と成つてしまひ御案内の同樣に歌舞伎狂言などは全く此人形の眞似のみ演てゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があるのです。兎も角も此人形芝居の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後になると漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、結局あの大阪の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつたと見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黑坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他太夫の引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長が今日に至れりと云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきが無いのであります。さて當文樂座は百餘年の昔淡路の人植村文樂軒が大阪高津區に櫓を起したのに始まり、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのであります。以來發展を來たしてゐましたが大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失しましたが機を得て昨昭和五年一月四ツ橋に新築開場した次第であります

而も日本にこれ一座ぎりと云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同樣日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうかと考へます次第で御座ゐます。序でながら此人形は大體、首胴、手及び足の四部に分ける事が出來、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々が定まつて居ります。例へばげんい、びし(檢非違使)と云ふのは、竹本座の『用明天皇職人鑑』の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば『寺子屋』の源藏、『妻八』の八郎兵衛、或は『千本櫻』の銀平、『陣屋』の盛綱のごとき、なほ之の眼り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では賀盛なども之ですが然し南水漫遊などを見ると別に成つて居るやうであります。それから矢張南水漫遊にはば素盡鳴とありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事があると云ひます。兎もあれ菅相亟や『瀟雪』の兵衛、あるひは『紙治』の孫右衛門などを勤める首で矢張竹本座へ近松が書いた『日本振袖始』から出た人形だと申します。それから若男といふのは源太とも呼んでゐるとか聞きますが持役としては『朝顔日記』の駒澤に『太十』の重次郎、その眼隅へ張を入れ其眉を引きつめると『阿古屋』の重忠に成つたりし他種類の苦男は敦盛の役などをすると云ひます、又所謂おやまの中にはおむすと云つて之は勿論娘の事で『野崎』のお染『帝坂』のお里『妹脊山』のお三輪などを勤めるのもあります。南水漫遊に傾城とあるのも多分之と同じものかと考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。

七福神寶の入船

壽老人　竹本文字太夫
辨財天　竹本南部太夫
大黑天　竹本小春太夫
布袋　竹本源路太夫　竹本文太夫
福祿壽　竹本相生太夫　竹本鏡太夫
惠比須　豐竹呂太夫　豐竹つばめ太夫
毘沙門　豐竹千駒太夫　竹本播路太夫

野澤吉彌　豐澤廣助　野澤勝平

七福神寶入船

ふくじんたからのいりふね

珍らしい上演で、景氣水をさし招く七福神の人形が艷かな咽喉さ絃の調べにおもひ〳〵の所作が演じ目出度〳〵の寶の船を乘入れるといふ趣向

（床本）七福神寶入船

四方の春風豐にて明て目出度初日影青海原にさし出て、千里の外も見へ渡り、雲井の空に舞鶴の蓬が嶋を間の當り、筆に書とも及ぶまじ、山の端にかゝる霞の中よりも、浮れ出たる神々の七の福を銘〳〵に積や寶の船遊び呑や謠へや酌に立つ其色こそはなよ竹の生る嶋にぞ住賜ふ辨財天女にしいられて、さへつ押へつ盃の機嫌上戸ぞ賜はしきコウ見渡した所は千里海原銀世界、アゝよい眺めじやな、アハゝゝサア〳〵〳〵是からめい〳〵に嗜の藝而し、まづ年役に壽老殿初め賜へと口に、そう立れば、さればとよ、肩髮共に冬が れて雪と見まがふ程なれど、若い時分はチョイ〳〵と、さへずつて見た雀殿踊り忘れわ譬もある、されば共調の拙なきは子供に戻り、老人が此三味線で玉琴に似せるも時のチホゝゝ笑ひぐさ、早取上てかきならす忍ぶ身や夜な〳〵燦る澤の螢火小夜更てヨウ〳〵〳〵扨も彈たり爪音のお年に似合ぬはなやかさ、扨此次は誰やらんと、見やれば、後へどつしりと腹と袋で乘合の塲所を狹のたどふ川殿チヽコレハよい所へ布袋樣、サア〳〵早ふにあたまをかき、是は

鶴澤芳之助
鶴澤友之助
鶴澤友造
鶴澤友平
琴野澤勝芳
胡弓豊澤仙三郎

人形

辨財天　桐竹紋十郎
壽老人　桐竹門造
大黑天　吉田文作
福祿壽　吉田玉市
布袋　吉田小兵吉
惠比須　吉田光之助
昆沙門　桐竹紋太郎

迷惑此方は坊主の身なれば　嗜の音曲などは不得手なり、唐子共らを慰めの、謠に合す肝皷、布袋　戯を腹をかゝへて聞賜へ君は船〳〵臣は水々水よく舟を浮べ〳〵て臣よく君をあをぐ御代さて　かへす〳〵もよき御代なれや〳〵ヨウ〳〵〳〵扨も鉢人かな　こまかに腹の打はやし、お手際肝心、見事〳〵と響そやす、聲　中よりちよつこりと脊ばひくけれどにこ〳〵と色の黑いを自慢やら大黑天と付賜ふチホヽアハヽチホヽアハヽチホハヽヽほゝ笑てこそ座に直り我も一つの隱し藝皆が望に乘が水て胡弓の音を一興にいざ備へんと彈出す、宵の遊びの花やかに、ざこれの床の夜もあけて夢と覺ては興もなし、あすは持こすほろ醉のれむりは絕ぬ時もなし是が遊びの誠なり、ヨウ〳〵〳〵見事〳〵いづれに惡かはなけれ共、男ばかりで花がないさし詰こゝらは別品のお辨女郎のお持前、琶琵の一曲所望しよふサア〳〵早ふに、辨財天おもはゆぶりに、につこりと朝な夕なに手にふれて、好みし業と言ながら琴三味線の音に替り酒宴の興には似も付ず殿達ばかりの其中へゆるさせ賜へと、座を立ばソリヤ手の惡い逃ふとはこんりんならくの底までも賴がけたる琵琶の曲、是非に所望と手に持せ、心耳をすまし、聞たもふ、抑々江州竹生嶋なる辨財天女の由來を委しく申も愚かや昔々孝安天皇御代の時とや、頃は三月、つちのと巳の日の辰の上刻二本竹の根面を揃へて、ゆる

き出たる、此嶋なりとて竹に生るゝ嶋とは名付て、本尊女體に渡らせ賜へど神德あらたは申も中々恐れみ〳〵ヨウ〳〵〳〵見事〳〵と譽そやす、聲の内より、ぬつと出す、長いあたまのてつぺいに、かぶせて出たる獅子頭、福神仲間の道化役一座はどつとおかしさの、笑ふ門には福祿壽、角兵衛獅子とぞ見へにける、なんじやいなげほふ樣、長いあたまに獅子を冠つて、エヽ聞へたコリヤ何じやな、角兵衛獅子の眞似じやな、お前の角兵衛獅子なら、角兵衛獅子に面白からう、サア〳〵所望じや〳〵越後の國の角兵衛獅子、國を出る時や、親子連、獅子をかぶつてくるかと迫つて首を振まする、親父やまじめで笛を吹ヨウ〳〵奇妙〳〵と譽そやす後へ水干折烏帽子、勇備の姿、右の手に黃金の釣竿つゝ立て抑〳〵是は西の宮の姪子三郎左衛門とは我事なり、扨も各々藝赤し曲に我等は及ばれど、此釣竿で船端を、たゝく太鼓の音に似せ、打出し打ト刻上、評判粗むぞ評判じや、評判〳〵〳〵じやと、打はやす奇妙〳〵扨もこまこふ打はやし、一しほ興に入ました、誠に肝心〳〵と、どつと一同にほめければ、そこで毘沙門腹を立て、同じ仲間の内なれど我は異形の姿故、嗜む藝は有まじと望まれぬも尤なり、出や一曲耳にふれ船の唾を覺さんと、取出す三味の調歌や寶々を積上る船に福神集りて、藝のしらべや七つのかはり音、かへて秘曲を彈わくる、實に福神の音曲の數をならべて積上し浪乘舟の音のよき調を代々に傳へける。

竹の間の段

竹本錣太夫
豊澤新左衛門

人形

乳母政岡　吉田文五郎
妻八汐　桐竹紋十郎
妻沖の井　桐竹政龜
女醫小卷　吉田扇太郎
鶴喜代君　吉田文二郎
一子千松　桐竹紋司
忍び　吉田傳之助

伽羅先代萩

竹の間の段
御殿の段
床下の段

安永六年奈河龜輔の作で人形に移れたのは天明五年正月江戸堺町結城座で作者は杉貫四、吉田角丸、高橋武兵衛、全體の筋は奥洲五十四郡の大守伊達家のお家騒動で義綱公が江戸參勤の砌吉原の太夫高尾を見染めてお家を顧みず公儀への聞へもありと肝臣等が主君を無理に隠居させて、幼君一人のお家横領を企てる、忠義一徹の乳人政岡の苦忠は一通りでない、飯も御殿で炊くといふ忠節振である。幼君鶴喜代を守護する、政岡一子千松の孤忠、涙の溢るゝ親子の至情、早春二月を飾るにふさはしき名品。

(床本)竹の間の段

制すべき身の制せられ光り失ふ義綱公、蟄居まします其上に代繼の若の所勞とは言含めたるお乳がはからひ所存は深き奥御殿の出入を堅く改めてむさと、風だに通さゞりけり。竹の間の襖押開き信夫の庄司が妻女沖の井、つゞいて渡會銀兵衛が妻の八汐、廊下渡りで立留り、イヤ申、沖の井様若君御心例ならずて、此頃では御膳もかつきつ召上られぬよし其上男たる者はお嫌ひなさると有て近習の人々も御前へ出る事ならず、お乳政岡殿ばかり、お傍を放し賜は

ぬとはごふした御病氣私はとんと合點がゆかぬ、さればいな、我々も此樣に毎日〳〵上りはすれど女中がたの取次で御機嫌を何ふばかり、けふは何卒、御對面を願ひ御樣子をとくと窺ひ奉れと夫の言付ヲ〻そふでござりませふ共、今朝伯父御刑部樣より、御使ひ立ち、家中にても重たるべき者共の、女房などは苦しかるまじ、對面を致さるゝ樣にはからへよと、お乳の人へ仰付あつたれば、今日は是非共、お逢遊ばさるゝでござりませふと噂半へ腰元立出、殿御是へお出でしらせの中に、まだ頑是なき鶴喜代君お傍のお伽もおないごし政岡が子の千松が、臾て出たる鳥籠の、エイ〳〵サツサ愛らしき仰に付添お乳の人はつと二人は頭を下恐れ敬ひ奉る、政岡御前に手をつかへ爲村の妻女沖の井、渡會の内室八汐、御病氣御窺ひのため上られまし御挨拶遊ばしませと、お乳が詞に、うなづきたまひヲ〻二人共よふ見舞てくれた、太儀〳〵と情ある仰にはつとおそれ入る、御悩以てのほかと承はりしに合しては、御顔持もやつれ賜はず先はお嬉しう存じ上ます、併し御膳もうか〳〵召上られぬ由、それでは自然と御身の弱り、何卒おすゝめ申上たさ聊か用意致しました御配膳差上たふ存じまするソレ女中方沖の井が持參致せし御膳ソレ〳〵早ふの、詞の内、はつと答へて腰元が捧る御膳、目八分御前に直せば嬉しげにそんならもふ飯を喰べても大事ないかと、座に着たまへば政岡が尻目にきつと、にらまれて、イヤほしうない、いやぢや〳〵アレ見い千松雀が飯を喰たいやら口をあけてさもしいやつの、笑へ〳〵と手を叩き紛らしたまふ有樣はお乳に心を沖の井もよふす有んと控ゆれば八汐は席をすゝみ出コレ政岡殿御膳も召上られぬ程の事ならば、なぜ典藥は召れぬぞ、サアそれに油斷とてはなけれ共男對せし者をお嫌ひなさるゝ故御容体書にてお藥調合させるばかり、サアそふ承はりし故、心付しは御典藥大塲道益が妻の小卷こそ夫に劣らぬ醫術の者、お脉窺はせんため召連た、ソレ小卷を御殿へ通されよと押付業も悪工みしめし合せて奥の間へ頓て呼出す女こそ遏に醫師のつまはづれ、所体には似ぬ不器

量の顔に苦みは良弼の驗を見せて一手柄とはるか末座に控へ居るヲヽ是は〳〵道益殿の室、小卷殿とやら若君様の御脈体、御窺ひ遊ばされよ、サ近ふ〳〵の口移し、御免を請て御傍へ、おめる色なくにじりより、御手を取て頭を傾け押へつゆるめつ暫考へコリヤコレ今をも知れぬ御脈体、モウ〳〵〳〵耆婆扁鵲でも叶はぬ大事と言ふに皆々顔見合せ、暫し詞もなかりしが、心中亂、政岡は若君としつかと抱きしめて、ムウ御大事と言ふて其上の事があらふか、見損じなりとて御咎めはあるまいぞやとくと心を鎮めて、今一應も再應も眞脈有、ハヽなる程、只今窺ひ奉る御脈は絶体絶命さりながら御面体の血色には少しも恙ましまさず、ヤ恐れながらお居間を移し今一度お窺ひ申さんと、座をさがれば政岡も小卷が傍へすりよれば、再び探る浮沈遲速とくと伺ひコリヤどふじや、あれなるお居間で見た時は必定の御死脈、今又是にて窺へば隨分健やかな御脈体、ハテ心得ずとお居間の方、きつと見やれば透さぬ八汐、掛たる長刀追取て、石突つゝ込天井の板こぢ放せば怪敷曲者落るを其まゝ取て伏せ、通路の鈴の繩引切、高手にしつかと戒めたり、サア死脈の筋が現はれた、有様に白狀せい、陳ずるに置ては拷問にかけん、サア〳〵何と〳〵と、しめ上ればアヽコレ〳〵申もふします〳〵わいの、イヤモ高が鶴喜代君を殺したら褒美やらふ殺してくれと有る故、ハイ〳〵〳〵慾から頼まれた事でござりまするはい、ムヽシテ其賴人の名を聞ふ、サ言ずば水責鐵砲、ひしぎと搦めし脇に長刀指込こぢ上ればアイタヽヽアヽ言ます〳〵イヤモ有様に言ますはいのハテ何とせふ、こうなつたらモウ叶はぬコレ〳〵〳〵今白狀する程にの必ず恨んで下さるなや、アいとしやの、ハイ〳〵是も子故の闇からでござります、アレアノ千松が世に立たい、どふぞ若君を打殺して、くれとアノお乳の人の賴み故と聞より政岡氣をせき上げヤイ〳〵〳〵だまりおらふモ餘り、何れて詞が出ぬ、ついど見しらぬ下郎めが大それた事言かけしはエヽ聞へた、此政岡に難を付和子のお傍を追退んと、コリヤ工んでの拵へ事じやな、偖其方人を白狀

させて見せふぞと勢ひ込んで、立ける為八汐が隔てゝそふはさせぬ、アノマアたけ〳〵しい顔はいの、知て有る〳〵イヤサこなたの工みといふ事はサ知れてあるはいの、ムゝそりや何故にマ何を證據、チゝ其證據はコレ此願書、鶴が岡の松が根に人形諸共埋めて置た、若君を呪詛恐ろしい文言願主松が枝節之助乳母政岡と書記したがサ慥な證據イヤ〳〵〳〵譬いか様の物がありとても天道こそよく御照覽更々此身に覺へはないムゝ覺へなくば言譯聞ふサア露聊も知らぬが證跡　身の言譯イヤ、そなたの心が外から見やうかサ知れふかいの、こふ露現した事でもまだ辯口で言曲て見る氣かサア言はれるならいふて見いサアサ、言へ聞ふ、サアサアサア〳〵サ、何とゝせりかけられて、政岡が覺へなき身の言譯も證據なければ今更に無念涙に詞なし、ムゝハゝハゝゝゝチゝマ天命は恐ろしいものぢやな、ムゝハゝゝゝ無念なり口惜いか、チゝアノマア口惜そふな顔わいの、盜人たけ〳〵しいと餘人は格別、此八汐、其涙が呑込ぬ、言譯立れば大罪人役人中へ引渡して糺明さすと飛かゝつて、引立れば泣出す千松若君は扇ふり上げ八汐が手先御腹立のつゞけ打、チゝ痛〳〵やの申し、若君様コリヤ何となされますへ、アノ乳母めいな、あなたを殺さふと致します、チゝこは〳〵チゝこはやの、チホゝゝゝサア〳〵早ふ牢へ打込ませふ、イゝヤ殺されても大事ない、ヤイ政岡必ず何所へも行なよ、アレ千松乳母を牢へ入るといふはいやい、いイかゝ様を牢へ入るなら、私も付て參ります、チゝおれも一緒に行ふぞよエゝそりやマア何を御意遊ばすぞいの、アノ政岡はお家をねらふ大科人イゝヤ科人でも悪人でも乳母一人はやる事ならぬテモ伯父御、刑部様の仰付られイゝヤ其刑部もそち達も、皆おれが家來ぢやないか、夫程牢へ入たくば政岡が代りにそち達から牢へ行け、乳母と離れて居る事はいやじや、〳〵と取縋り乳房の恩を子心にも忘れ賜はん御仁心、有難涙お乳の人勿体なやと抱きしめ泣より外の事ぞなきエゝはがいやの、イヤモ何ぼおかばいなされても政道にはかへられぬと、又立かゝるを沖の井が引戻して

御殿の段

切　竹本土佐太夫
　　野澤吉兵衛

人形

乳母政岡　吉田文五郎
鶴喜代君　吉田文二郎
一子千松　桐竹紋司
妻八汐　桐竹紋十郎
妻冲の井　桐竹政龜
榮御前　吉田玉次郎
女醫小卷　吉田扇太郎

押隔て、イヤ政岡殿に科はない、テモ曲者が慥な白狀イヤサア花陀が血筋か、藪師の化身かしられぬども高で女のアノ小卷が、御死脉と考へて天井を見た日遣ひを見ると其儘長刀で天井の板一二枚、突放したはづかの間から、わざ〳〵飛でおりたる曲者餘り手筈がよふ過きで此沖の井は合點が行かぬ、ムハ〳〵〳〵アハ〳〵どふなりと非難は付よいものじやな、したが何ぼ御發明でもコレ此願書、願主松ケ枝節之助乳母政岡と有々とサ、書たが覺へない證據、ソリヤまたヤなぜへ、されぼいなあ。左程の工みをする者が我名を有々と記し置、後の難儀になるやうなあざとい事して置そふな物と思し召か、がもしや其名が八汐とあればお前は科を蒙る氣か、サアそれはホ〳〵人を呪はば穴二つ、と詮議立する八汐樣、お前の胸がヤ心得ぬと、工みの底を見透せしは、遣は庄司爲村が奥、床しくぞ見へにけり、チヽモウよいはいな、テモマアつべこべとよふおつしやるのが、所詮分らぬ水かけ論マア此儘にさし置て、油斷のならぬ御殿の樣子、今宵は八汐がサ宿直するハテナア、それは御深切な御心付、イヤナニ、政岡殿にも隨分と心を付若君樣の御介抱ナ、サ御病氣の根を糺したらさつぱりと御本腹イヤモウ大概見脉でも知れてある、一味のサア一味の藥でもナ、利がきつい油斷はならぬ、ノウ小卷、そふでないか、イザ八汐樣、御休息とうはべは淺ふ底深う漂はされて兩人は機へも寄らず

床下の段

竹本長尾太夫
豊澤廣太郎
豊竹綾太夫
野澤八助

沖の井が目鏡はつさぬ一捌き曲者引けと嚴重に、心は隔つ竹の間のふすま押開けいりにけり。

（床本）御殿の段

押明け入にけり、あと見送りて、政岡がまさなき事も身にかゝる科は晴ても晴やらぬ養ひ君の行すへを誰に問ふべき樣もなく心一つの憂思ひもの案じなる母親の顏を眺る千松に鶴喜代君も打守りコレ乳母モウ何いふても大事ないかやハイ〳〵外に誰もおりませず何なりとも御意遊ばせ、ほんにさつきに沖の井どの若へ御膳を上られたとき兼て乳母が申た事お聞きわけ遊ばしてよふマアお上り遊ばさなんだな、それでこそ此乳母がお育て申た若殿樣、ヲヽお出かしなされた適れなと譽ればあどなき稚氣にヤイ乳母、ひもじいと言事は强い武士の言ぬ事と常にそちがいふた故おれは言はねどさつきにから空腹に成たはやい、ヲヽお道理でござります、けふは思はぬ事故に、御飯のこしらへも遲ふなり、あなた樣にも嘸お待兼千松もよふ辛抱しやつた、モウ拵へて上ますと、たち上ればノウ乳母爰にある御膳をたべるのは惡いかや、アヽイヤ申其御膳を上る程なれば乳母も苦勞は致しませねど此程から怪しい事ども忠義厚き沖の井殿差上られた其御膳疑ひはなけれ共油斷のならぬ此時節、上げてよければ此政岡が上まする、コレもふお聞遊ばせや、今お館には惡人はびこり御近習小姓膳番迄ちつ共心は赦されず

人形

貝田勘解由　吉田玉松
松ヶ枝節之助　吉田玉幸

忠臣の節之助は、不義者とて遠ざけられ力とする者もなく朝夕の御膳は皆庭へ捨させて、私しが手づから拵へてさし上るももし毒、ヤサごく藥の工みもと、みぢんも心は赦されず空腹なもお道理ながら、御前のおこらへ遊ばすため此千松も四五日前から三度の食事もたつた一度忠義故じやとこらへております、コレ千松そなたは言事よふ聞て何共言はずに辛抱する、チヽ賢い〳〵強い〳〵強者ぢやと譽れば千松、コレかゝ樣侍の子といふものは、ひもじいめをするが忠義じや、またたべる時には毒でも何共思はずお主のためには喰ふものぢやと言しやつた故にわしや何共言はずに待て居る、其かはり忠義を仕て仕まふたら早ふ飯を喰はしてや、それまでは翌日までもいつまでも斯きつとすはつてお膝に手をついて待ております、お腹がすいてもひもじうない、何共ないと、澁面作り涙は出れど稚氣に譽られたさが一ばいに、こちや泣はせぬはへと額を撫て泣顔を隠す心は遠がるにも名にあふ武士の胤なりき、母は健氣さいぢらしさ目に持つ涙、心には御前に聞す譽詞チヽそふじや〳〵強者じや、千松はいかふ強ふなりやつたばいの、イヤ千松よりおれが強い、ヤイ政岡、おれはちつ共空腹にはないぞよ、大名といふ者は飯も何にもたべずに斯すはつて居るものじや、ノウ乳母、おれは強者じや是は又けうさい事のそふお行儀な所を見ては又々千松なごは叶はぬ〳〵チヽお強い〳〵そふお強ふてはコリヤ早ふ飯を上ざなるまいドレこしらへうとかい立てかたへに鍔る黒棚より取出す錦の袋物風爐にかけたる茶飯釜の湯の試みを千松に飲す茶碗も樂ならでお末の業を信樂や、いつ水さしを炊桶流す涙の水こぼし心も清き洗ひ米釜にうつして風爐の炭直してあをぐ扇さへ、ほれも碎くる思ひなり、アレもふ飯じやと御機嫌の我子も倶に悦び顔見れば胸までつゝかゝる涙、呑み込〳〵で、もふ上ますぞへかゝ樣早ふ上まして やチヽ上ませいで何とせふ、今上まするか、まちつと煮立其あひだお氣に入りのモウ親鳥かくる時分そこへ直してお慰みアイ〳〵〳〵と千松が返事はすれど立惱み歩む姿もたよ〳〵とおき直したる小鳥籠忠と敎

へる親鳥の軒端の竹に飛かはす子は孝行に面疲て、はごくみかへす鳥羽玉の涙をかくすうないかみ、かゝれば、直ぐまゝになる、ソリヤもふ飯じやと悦ぶ子、コレ千松何共ないと言ふ下からせはしない何なの事じや、いつも諷ふ雀の歌諷ふて御前の御機嫌とりや、エゝどんな子であるはいと呵られておろ〳〵涙しやくりながらのしめり聲、こちのうちのちさの木に〳〵雀が三疋さまつて〳〵一羽の雀のいふことにや〳〵アゝコレ夕ア呼だ花嫁御〳〵竹の下葉を飛おりて籠へ寄くる親鳥の餌ばみをすれば子雀の背さしよする有様にアレ〳〵乳母、雀の親が子に何やら喰しをるおれもあの様に早ふ飯がたべたいと小鳥を羨む御心根チゝお道理じやと言たさを紛らす聲もふるはれて、わしが息子の千松が〳〵エゝコレ千松殿様の御機嫌をエゝ何を泣顔する事がある、ちいさふても侍じやコレ七ツ八ツから金山へ〳〵一年待共まだ見へぬ〳〵乳母まだ飯は出來ぬかやチゝもふ出來まする二年待共まだ見へぬ〳〵かゝ様飯はまだかいの、エゝせはしない、そなたまでが同じ様に行儀の悪いイエ〳〵わしはたべたい事はなけれど御前様がおひもじからふと思ふて、エゝ何のお強いお殿様がおせがみなされふソレヤそちがぜがむのじや、イエ〳〵わしはせがみはしませぬ、サアせがまずば今の歌聲はり上て諷ふて見やと言はれて、涙の聲はりあげ、ほろり〳〵とお泣きやるが〳〵力なく〳〵泣聲を隱してつれる母親が何か不足でお泣きやるぞ〳〵歌の唱歌も身にあたる涙はお乳が胸の内、子故のやみぞやるせなき若殿小影を打眺めアレ〳〵千松ちんがくる呼べ〳〵ちんよこい〳〵と呼ばかけくる椽の上チゝよい所へよふ來たな、ア、ほんにわれは仕合者、おすばりのこの御膳殿様の御機嫌を直した御褒美戴けと紙打敷いて並ぶれば悦ぶ體を見る若君、コレ乳母、おれやあのちんになりたいと、羨賜ふ御風情、聞く悲しさをこらへ兼チゝお道理じや〳〵日本國の其中に幾億萬と限りなき人の果報をうけ賜ひ五十四郡の御主と榮耀榮華の上もなき何くらからぬ御身にて思ひがけなき御辛抱譬賤しい下々でも斯言事があるものか、ましてや終

に見も聞きも涙ながらに政岡が申す事とておさなしう聞入たもう勞はしや、現在御門の御家來が邪非道に組從ひ、殺害せんとの工みとは知たる故に影身に添ひおまめな御身を御病氣と世間を僞り胴慾に稚い御身に朝夕さへ思ふ樣に上ぬ故鳥獸の餌はばむのを羨しがるお詞は御尤共お道理共いふに言はれぬ御身の因果、雀やいぬに劣つたる宮仕へして、忠義じやと言はれうものかと喰しはり胸も煮立風爐先の屏風にひしと身をよせて奥を憚る忍び泣稚げれ共天然に太守の心備はりてコレうば何で泣ぞりやいそちや千松もたべぬ内おれ一人せはしいと思ふなら、もふ堪忍して泣てくれな、そち達二人がたべぬ内はいつ迄もおれは、こらへて居る、おれがたべても乳母がたべずに死にやつたら惡いな、千松そちが死でも惡いなア、ハイ〳〵〳〵よふおつしやつてつかはされます、ア、有難ふござります、乳母が今泣たのはアリヤ飯の早ふ出來る呪何にも悲しい事はござりませぬコレもふ涙はないナ、御らふじませ、ホヽホヽ〳〵〳〵、チヽおかしい〳〵サア〳〵今のまじないでもふ飯が出來ました、いつもの樣ににぎ〳〵して上ましよと、飯がひ取て手の内に結ぶを千歳と待詫びて、手を出し賜へばマア〳〵お待遊ばせや吟味の上にも吟味せねば御辛抱のかひがない、先御毒味と千松が顔を眺めてムヽ氣遣ひない、サア〳〵御前お心靜に召ませといふにいそ〳〵御悦び千萬石を手の内に握る御身に引かへて只一握りの握り飯を數の珍味と思し召し御心根の勿体なやと君を思ひ我子を思ひ心の奥のしのぶ山忍び涙の折からに梶原樣の奥方御入りハテ心得ぬ梶原の奥方とは何にもせよ、お通し申せ、コレ千松そなたは次へ常々母が言し事必ず忘れまいぞサヽ早ふ〳〵と追やつて衣紋繕ふ其内に冲の井八汐も出向ひ敬ふ禊押ひらかせ梶原平三景時のおく方、夫の權威に榮御前しと〳〵と座に直り、チヽどれ〳〵も出向ひ太儀自今日來りしは右大將の御上使夫景時承はれ共義綱の一子鶴喜代病氣に依て男たる者と禁じたると聞し故夫にかはる此榮義綱隱居の其後鶴喜代の所勞殊に食事も進まぬよし、御心を付られし此

御菓子頼朝公より下され物、有難く頂戴あれと持せし菓子箱差出せば八汐引取り、コレハ〳〵有難い、大將よりの下されもの、サア〳〵申し若殿様、早ふ頂戴遊ばしませと蓋押ひらきテモマア見事結構な此お菓子イザ召ませとさしHす遏わらべの嬉しげに立寄賜ふ鶴喜代君、アヽ申し御前様久其様なさもしい事御病氣の御身なればお毒になつたら何となさるゝ、こつちへお越と政岡が詞打けす榮御前、ヤア頼朝公より下さるゝ御菓子なに疑ふて頂戴させぬぜひ此榮がたべさせる、アイヤそれでもムヽ但し頼朝公の仰は背いても苦しうないか、サアサアサア〳〵〳〵と櫨柄押、奥より走つて千松が其菓子ほしいと引摑み何のぐはんせも只一口八汐が惚り榮御前、毒の工みの現はれ口忽ち惱亂目を見詰め蹴ちらかしたる折は散亂八汐は透さず千松が首筋片手に引寄せてくはい劍ぐつと突込ばわつと一聲七轉八倒驚く冲の井政岡が仰天なから一大事と若君抱き我部屋へ押やり參らせ戸口に付添ひ守り居るヤア何をざは〳〵騒ぐ事はないはいの添けなくも頼朝公より下されし此折踏破りしは上へのぶ禮ちいさいがきでも其儘には差置れぬそれゆへに手にかけたはお家のお爲を思ふ八汐が忠節ムヽハヽムヽハヽヽヽチヽかばいそふに〳〵痛いかいのふ〳〵他人のわしさへ涙がこぼれるコレ政岡殿現在のそなたの子悲しうもないかいの何のマア、お上へ對して、慮外せし千松御成敗はお家の爲、ムヽスリヤ是でもこなたは何共ないかヤ、是でもか〳〵となぶり殺しに千松が苦しむ聲の肝こたへこたゆるつらさ無念さをじつとこらゆる辛抱は只若君が大事そと涙一滴目に持ぬ男増りの政岡が忠義は先代末代まで又有まじき烈女の鑑今に其名はかんばしき、榮は始終政岡がそぶりに氣を付打ほゝ笑ヲヽ出かした八汐右大將より鶴喜代へ下さるゝ大切の御菓子小悴めが出しやばつて、すつての事に大事の工みイヤアノ大事の菓子をあらした科、殺したは八汐が働き遏渡會銀兵衛が妻程ある、政岡には自が言聞す事もあり、冲の井八汐両人は暫く次へ間を隔て、遠慮召れと榮の詞、何と違變も冲の井が深き心も和尚津海の汐の八汐も打つ

れてともなひ一間へ入にける、後先き見廻し榮徃前、政岡が傍に摺寄て年頃仕込しそなたの願望、成就して嘸悦ひマ〜何とおつしやるアーイヤモ隱すに及ばぬ、東西分ぬ内よりも取替置しそなたの子の鶴喜代が身につゝがなふ義綱の誠の忰千松がこの最期嘸本望であらふのふ、エーチ〜取替子の樣子は先達て知たれ共もしやと思ひ最前から窺ふて見る處、血脉の子の苦しみを何ぼ氣强い親々でもこたへらるゝ物じやない、若殿にして置く我子が大事、そなたの顏色かはらぬは取替の子に相違はない、コリヤ皆心は同腹中、刑部殿共内談しめ諸事我夫の差圖あらん先今日は立歸り病氣の樣子申し上ん、必ず何事も人に悟られまいぞやと、一人呑込ゆう〳〵と舘をさして歸らるゝ、後には一人政岡が奥口窺い〳〵て、我子の死骸抱き上げ、こたへ〳〵し悲しさを一度にわつと溜涙せき入せき上歎きしがコレ千松よふ死でくれた、出かしたな〳〵そなたが命捨た故邪智深い榮御前取替子と思ひ違へ儕が工みを打明しは親子の者が忠臣を神や佛も哀れみて鶴喜代君の御武運を守らせ賜ふか、ハ〜〜〜有難や〳〵是といふのも此母が、常々教へて置た事、稚心に聞きわけに手詰になつた毒害をよふ試てたもつたのふチ〜出かしやつた〳〵そなたの命は出羽奥州五十四郡の一家中所存の臍を堅めさす誠に國の礎ぞや、とは言ものゝかはいやな君の御爲かれてより覺悟は極めて居ながらもせめて人らしい者の手にかゝつても死ぬ事か、素性賤しい銀兵衛が女房づれの劔にかゝりなぶり殺しを現在に傍に見て居る母が氣はどの樣に有ふぞふ有ふ、思ひまはせば此程から、諷ふた歌に千松が七つ八つから金山へ一年待て共まだ見へぬ、二年待て共まだ見へぬと歌の中なる千松は待ふかひ有て父母に顏をば見せる事も有ふ、同じ名の付く千松の、そなたは百年待たとて、千年萬年待たとて、何の便が有ぞいの三千世界に子を持た親の心は皆一つ、子のかはいさに毒なもの喰なといふて呵るのに毒と見へたら試て死でくれいといふ樣な、どうよく非道な母親が又と一人あるものか、武士の胤に生れたは果報か因果かいぢらしや、死るを忠義

といふ事はいつの世からのならはしぞ、ここりかたまりし鐵石心、道女の愚に返り人目なければふし轉び死骸にひつしと抱き付き、前後不覺に歎きしはことはりすぎて道理なり後にすつくと八汐の大聲、何もかも樣子は聞た、こつちの工みの妨げ女おのれも生ては置れぬと詞の一間押明て、ヤア不忠不義の銀兵衛夫婦工の次第白狀せよと、立出る冲の井ヤア此八汐に白狀とはチヽ其證人は爰にありといひつゝ出る顏見て惚り、ヤアそなたは小卷、チヽよい證人で有ふかの夫道益にいひ付て無理に毒藥調合させ、此事外へもらさふかとよふ夫を殺したな、夫の敵と思へ共女の身の討事叶はず、わざと惡事に一味してまつ.斯手づめを上ふため、鶴喜代君と千松を入替子といふたも小卷、それ故に榮御前うま〳〵此場を歸りしも裏の裏行く匙加減、サアまつ直に白狀と忠と不忠の喰合せ、毒藥返つて藥となる顏に似合ぬ裁配は類内儀の手柄也、モウ最まで〻八汐が懐劔・心得政岡請流す互にたしなむ太刀捌き手を盡したる二人の女我子の恨一心に突込懐劔打落し直に切込八汐が肩先きひるむを取て突通され虚空を摑んでもがき死、惡の報ひは忽ちに心地よくこそ見へにけり手柄〳〵と、冲の井小卷、倶に悦ぶ其折から物音人聲さはがしくエイ音は椽の下油斷ならざる若君の御身の上も氣づかひなり、ヤア腰元中、あかし〳〵、はつとこたへもめい〳〵手燭てん手に一腰長刀もきらめき渡る椽の下身は鐵石の節之助寄くる忍びを人礫ばらり〳〵となげちらすものあいろもくらまぎれ尺拔群の大鼠口にくはへし系圖の一卷、飛鳥の如くかけ行を透さぬ松が枝小柄の手裏劔鼠の頭忽にばつともえ立つほのほと倶にすつくと立たる異形の姿、アヽチヽ不思議や密に宿直の椽の下斯取かこみし曲者原騷に紛れ現はれしは群にすぐれし大鼠正しく忍びの幻術なるかムヽヽ怪しやな。此一卷を奪はん爲、大願成就嬉しやな、聲はるかに節之助、曲者待と聲より早くはつしと打たる以前の小柄心得松が枝忍びを楯胸先血煙曲者は後をくらまし出てゆく。

生玉の段

豐竹呂太夫
鶴澤叶太郎
（鶴澤叶太作）
豐竹つばめ太夫
豐澤仙糸
（鶴澤友二）
野澤喜代之助

人形

娘お染　吉田文五郎
丁稚久松　吉田扇太郎
善六　吉田玉徳

染模様妹脊門松

生玉の段より
質屋の段まで

明和四年十二月の北堀江座（豐竹此吉座本）初演作者は菅専助で、寶永年四八月の豐竹座上演紀海音作の「秋の白絞り」を改作したものである上下の卷よりなり質店は下段の切。初演は豐竹此太夫が語つてゐる、内容は浪華五町の質店油屋の娘お染はいつか丁稚久松と人目を忍ぶ仲となる、巷の噂は瓦版の讀賣となつて人々の口に上る、久松は未來で添ふ心中を夢みたが、醒めて物思ひ、同じ夢見たお染も山家屋清兵衛への嫁入は死んでも嫌といふ久松の父親野崎村の久作が皮足袋を土産にはるゝ尋れて來て老の涙の强意見、お染の母親の嘆きもあり、兩人も止むなく表面は別れることを得心し、久松は夜明まで奥の藏へ一時押込らる、かれて覺悟のお染久松はやがて土藏の内で互に見交はして、心中を遂げる

（床本）生玉の段

夢に見て現に逢ふてまぼろしに立甲斐もなき妹脊鳥、つがいはなれて後や先、しどけなりふり、袖つまも若紫にお染こそ深きちぎりを久松と地藏めぐりにかこつけて、人なきみちは手を引て、相合傘の二人連、小蓬にしばし立休らひ、イヤ申しお染樣思ひまはせば廻す程大それた此久松御恩も深き旦那樣の御目をかすめ

質店の段

切
豊竹古靱太夫
鶴澤友次郎

後
豊竹富太夫
鶴澤友若
豊竹辰太夫
野澤八造
豊澤團伊三

人形

娘お染　吉田文五郎
丁稚久松　吉田嬬太郎
親久作　吉田榮三
母お勝　桐竹政龜
親太郎兵衛　吉田小兵吉
質屋嬶　吉田玉七
質受男　吉田玉徳
門つけ　吉田利男
善六　吉田玉徳

て忍び合、御主のお前と女夫事、こちは隱せど人は知る、大事の御身に惡名の立も誰れ故私ゆえ　みんな仕なしたるばちあたり、御許されてとばかりにて合はす兩手をじつと取り、アノ久松のいやる事はいの、こふしたわけに成つたのも皆わし故にそなたの辛苦、結ぶ亙の惡緣もほれたが因果其樣になぜに女にすかるゝ樣可愛らしうは生りやつた、エゝつかもない、お染さま、そふおつしやるお前こそ、えくぼに人を迷はして、逢瀨うれしき假枕人目の關を忍ぶ身はつめたき冬の夜嵐に松吹く音にだまされて、ほいなき事の數々を言ふて見かへる野分道アレ見や、行こふ人々のよふ〳〵うまい二人づれ若い女夫となぶられて、はづかしやら嬉しやら、うさも晴行ひろ小路此久松は氣もそゞろ顏はほやけの地藏尊、廻りめぐりて生玉や應と見へすく伊豫すだれ爰へ〳〵と招かれてすれつもつれつつ手を引て二人の姿は小隱の茶屋の内へぞ入にけり、始終うかゞふ善六が走りかゝつてお染が小腕ものをも言はず引立る、わつと泣出すお染が有樣、コハ何事と久松がすかし見るよりヤアよい所へ善六め日頃の恨み思ひしれと隱せし懐劔拔きはなしあばらをかけて一トえぐりうんとばかりに倒るゝ善六サアお染樣人を殺せば猶以て生ては居られぬ此久松さらばとばかり突込劔一人はやらぬ諸共にと傍りの井戸へまつさかさま身はかげろふのあるやなし、胡蝶の夢さめはてゝ我住む家居となりに

けり。

（床本）質店の段

此間大阪町々で御評判の高い色事此あたりで大きな聲では申されぬ事、一人娘と子飼の丁稚、しめて寢油しんところろりふしは則ち才文口説上下に致して、さぢ本が六文、大きな聲では言はれぬ事〳〵じやといふも高聲町々の物騒がしき大三十日、質店の帳箱を慮生が枕肝腦を碎く久松思ひ寢の夢おどろかす初夜の鐘ふつと目覺しハアヽ嬉しや夢であつたかしたがあの賣聲は生玉で見た歌祭文とりもなほさずこりや正夢、あれもやつぱり善六めが拵らへて賣すのか引さらへてと立上りしがイヤ〳〵留だてしたら身に覺があるゆへにと人の口エヽ憎い奴といふもこつちの得手勝手、所詮死れとの今の夢人をも世をも恨まいと、又今更に身の覺悟、ナフコレ久松〳〵と思はず店へかけ出るお染顏見合して、ヤア久松そなたの身には別條ないか、お前もおけがは、そんならそなたも、お前も夢をハアはつさばかりにめい〳〵がさいごの夢の凶合せ幾瀨の思ひぞしんきなるぐゞり戸ぐはらり久松殿札は畫おこしておいた布子下され、ソレ元利と錢投出して受出す布子、ヤレ〳〵嬉しや、すでの事に一丁羅を遠い所へやらふとしたア命あれば正月に逢てめでたい忝けない、イヤモとかく命が物種じや嬉しやめでたや春の初にゆるりと逢ませふといそ〳〵歸る辻占をお染はいさみアレ聞きやつたか久松せんども死なふとしやつたを、無理に留めて今日が日までながらへ居るもぞふぞして一日なりと夫婦じやと、いはれて死たいわしが心、ハテ一寸延れば尋とやら氣をうき〳〵と持ちやいのと力付ても心根は俱にしほるゝ目に涙、なみだながらに稚子を裸にしたかぬくもりの、さめぬを待てど身は寒き解わけがけの女房がコレ丁稚殿こんな小いものは邪魔でもあろし又、値打もあろまいけれどこなさんののみ込でぞふぞ四百借てくだんせ、しらんす通りこちのわろの長煩ひ親子三人がほんの居喰、正月が來たとて樂しみもない娑婆世界、アいやゝの〳〵いつそ死で仕廻ふたら此苦はさんと助からふ、アヽ因果とぎちかは死

かれまいと、涙にまじる水潮を、すゝり上れば、こなたにも身につまされて落かゝる四筋の銭の目もわかず渡せば戴きほ〳〵と歸る姿を見るに付、どうでしれとの辻占かと、又涙にぞくれけるが申しお染様先度も言ふてくどけれど二人一緒に死ば心中、恩と情けの御主人や清兵衛様へ義理立ずわたしは何ぞ詰らぬ事を爲りながら書置して死で仕廻が申譯、お前は、ながらへ山家屋へ嫁入をなさるれば、親御様へは御孝行、清兵衛様のお顔も立ち世間にばつと立つ浮名も、人の噂も七十五日、其中には沙汰も止みお前のお身も御兩家も納るはつゐ今の事、おなじみがいには折ふしに只一遍の御回向も外の千聲萬部より嬉しう成佛致しますと、後は詞も泣入ればお染は顔をふり上てソリヤ曲がない胴慾な、高いも低いも姫ごぜの肌ふれるのは只一人、親兄弟もふり捨て殿御につくが世の教それにまだ〳〵悲しきは夕の風呂の上り場で此腹帶をかゝ様が見付さんして、コレヤお染此腹帶は何事ぞとうから様子知つた故度々のこは異見爺御の耳へ入まいと辛抱したがもふかなはぬ情ない事してくれたと泣しみづいてのお腹立、そなたに案じさすまいと今迄こふと岩田帶隱して居たがこんな身でどふ嫁入がなるものぞ、一緒に殺してたもいのと、膝に打伏、しやくり泣、臺所よりお染〳〵と母の聲、それ〳〵呼でじやマア奥へあいと返事はしながらも心は髮におきの船、裾もほら〳〵走り行かくとは白髮しら梅の打しり顔に咲花を手打てきなく鶯の鳴音は月日千蕪年頭歳暮の禮をかね一荷に荷ふ葉ふごは久松が親野崎の久作チゝ親爺様せつろしい大晦日、殊に夜に入てお出は何ぞ急な用でも有てかイヤ〳〵、いつもは年明けてから禮には。くれど今年は梅も早ふ咲き歳暮の禮を兼るに春くるはいなものと、どちらもはづさぬ様に境目の大晦日、嘉例の生花旦那様へ上ましてたもアゝ此千蕪も又嘉禮じや、皺のよるまでお出入をする様にお家様への手みやげと草鞋さく〳〵お上に上り、コリヤ久松よ、此お家こそ金持で、きはの拂はいつでも一昨日ちやんと仕廻ふてモウ正月の様なれど、おいらが在所は今頃が合戰最中、中々來られ

る譯じやなければ一時も早ふと氣をせいて來たばナいつがいつまで鋤鍬取てもよい果報も、堀出されず幸ひ隣りの與四郎が妹おくめを此中貰ふておいたも、おぬしが暇を旦那へ願ひ連ていんで身上渡し一枚敷を圍ふてなりと、おらは隱居する心じやハ〻旦那へ禮は付たりじやと落着顏に言い出すを聞く久松は死神の付たる上に在所の女房持てはあれ程思ふて下さる娘御へ義理立ずと思ふ色目を押隱し親父様何言しやる、わしが年はまだ七年是から先が御奉公留主預つたり、此様に店の用にも立つ最中、そんな事言はしやつたら旦那様のお腹立もふ〳〵逢ずといんで下されや親父が禮にわせましたとよい様にいふておこ、サア〳〵早ふさせり立る、ハ〻賢い様でもまだ子供じやハ〻コリヤイ緣付の事や親の後立る事はナ、どこの山椒太夫でも悅んで隙くれるは、世間に何ぼもある事じやはい旦那へいふたら早速に隙は扨置召おろしの上下を貰ふて見しよと、立を引留めアゝコレいかにこなたが文盲な土百姓でも相應な義理と法とは捨られまい八ツの年から爰へ來て、西も東も知らぬ者を御夫婦のお世話になり、手習算盤夜々は四書の素讀も習はして親より深い御恩を捨、禮奉公もする筈を、年季の内にどふ出られふ、イヤモ無法な人じやと、やり込れば久作額に青筋立ホウ親方のおかげで物讀したしるしか、さつぱりとした詰開き、道筋が立てコリヤ面白いハイおりやする通りあき盲いろはのいの字は右からやるか、左からこしらへるか其譯はしられ共、大恩受けた親方の娘御をそゝなかし徒かはく學文は、よもあるまいと思ふて居るはい〳〵アゝコレ〳〵〳〵そりやマア何を聞はつゝて埒もない事言しやんな、ヤイ〳〵〳〵ぬかすな〳〵、あらがふな、そぶ〳〵噂聞た上たつた今長堀の姨が所へ寄たればお家様から此御狀久松に意見してくれと、コリヤヤイコリヤ大盜人の儕になまだお慈悲な内證で賴んでおこさしやる心の内、有難いやらおいとしいやら儕をあら立たり、片相手が死るの生るのそれ悲しさの狀使殊にれつきとした聟殿の極つてあるお娘御それを取込嫁入をちや〳〵入て變改させ此後式

をしてやらふといふ儕こりや惡工みじやなア、もし子に迷ふて義理ある聟殿の緣を切、儕を娶はせ花香もない、ない、お氣にも染ぬ祝言させ隣傍へ歷々の聟や舅の行逢ひ見る度々にエ〜むやくしい、眼一人を棒に振つたも久松の、犬めゆへと、一生睨みつけられて何の手柄になる事じやぞい〳〵ヤイ六十に餘る此親はな、麥飯に五斗みそ汁、榮耀喰はよふせれど在所住居の氣さんじは、腰屈る相手もなく、惡を勸る友もなければ今日を眞直に暮すこそ人間なれ、非道な事して、榮耀がしたいかい、アヽ其樣な根性とはしらずコロ此足のあか切れを見をれ、二三月の頃の餅の樣にぼつか〳〵割てあれど、此つめたいにまだ足袋もはかぬぞよ、けれ共儕は小いから結構な內に奉公して、樂に育たやつじやもの、お仕着の木綿足袋ではもし冷でも受おろかと、唐物町三界へまはつて大まいの錢六百出して見た事もない此革足袋畜生の樣な儕にはかそふてゝ〳〵買てはこゝはい、親の意見の杖も穢畜生の革で拵へた此足袋が分相應戴きおれとばた〳〵〳〵たゝく眞身のこは意見、惡口ぬかした此頤ゆがまぬがまだふしぎと又ふり上てう〳〵〳〵身の誤りと親の慈悲、骨身にこたへ詫涙、お染はかけ出コレ〳〵〳〵久作殿久松の業じやない皆わしから起つた事、堪忍してやつていのと押隔つれば恨めしげにチヽ娘御樣よふ可愛がつてかばふてやつて下さります、忝いと言たいがエヽ聞入ませぬ〳〵はい、天にも地にもかけがへのない此悴め、立身がさせたさに八ツの年から御奉公其大事の一人子を木の空へ上る色事、よふ敎へて下さりましたのふ、ひよつとでんどの沙汰になり、主の娘を密夫〳〵と靑細引でもかゝつたら何と身も世もあられませふ〳〵ぞいの、それが不便さ氣づかひさ、一年に一度の元日も打捨て、お暇の願ひは皆あいつが可愛さから、其親心もしらず在所へいなぬと意地ばるも、大方こな樣の腰押じやなと、サ此樣に慮外を申しますも詰る所はあいつが爲ぞよいお子じや、ぷつゝりと思ひ切ておれは嫁入する程に在所へいれとたつた一口、おつしやつて〳〵下さりませ、コレお悲慈じや申しと手を合

しこぼす、涙に洗濯の布子の糊も落ぬらん、アヽコレ〳〵且那殿の居間が近い、まそつと靜に〳〵と暖簾を上てお染が母、はつと驚く久松親子何にも驚く事はない、様子は皆ウ聞した、子を持親の心は一つ、娘に恨み我子に意見も皆子に迷ふ親の因果わしとても其通り、恨つらみの久松め憎い仕方も腹立も、もふかふなつては呵る段はのけて置き主が家來に手をさげて頼まにやならぬ娘が事、是までの縁と思ひ切、ごふぞ在所へいんでたも久松頼む、わしが氣を推量してたも、此間も夜更けてお染が寢間へ行、わつゝくどいつ意見すりや泣てばつかり居る故にもし煩でも出よふかと言止みながらも得寢ぬは、つきつめた氣でひよつと又及物ざんまい仕出そふかと、夜着にまかれて夜明けまで寒さこらへて寢ずの番意見するのも、聲びくに、アノ氣の短い爺ごぜや、内外の者にも知らすまいと、火鉢さへ取寄ずふるひ上るも娘故、ちつとは聞分けない事かと身を投ふして泣喞てば二人は不孝と惡縁をくやみにおもき身の罪科此儘爰で死たいと聲をも上ず泣居たる久作涙すゝり上げア、子がなふて泣く者はないと、譬にいふも皆此事、御慈悲深いお家様のお詞、よもやいやとは言はれまい、ふつゝりと思ひ切るか、アイ在所へいんで女房持かいアイお主と親のお慈悲の意見何の否と申しましう、お染様の事はふつゝりと思ひ切りすぐに在所へ歸りましうチヽ出かした〳〵〳〵よふいふたナ、そふするがお主大事親孝行久松過分な嬉しい〳〵ぞよ、サア〳〵もふえい〳〵泣止め〳〵ドレぢゞかんでやろ、サつんとせい〳〵サアお家様私が方は片付ました、娘御にも大誠乞、いはしやるまでもない、久松が思ひ切るからは娘もいやとはいやるまい、向後心入がへて山家屋へいきや、ヤアイ、〳〵エヽモついあいとばかつでは濟ぬしつかりと返事仕や義理をしつた久作殿の詞をむそくに仕やると、わしやもふ生ては得居ぬと覺悟の剃刀取出せばアヽコレかゝ様勿體ない〳〵はいなア、久松の事はとんと是切り、山家屋へ參りますこらへて下され誤つたと、すがり歎けばチヽよふ得心して〳〵たもつたのふ、戀に上下の隔もなく二人と

枕はかはさぬと女の道を立通す娘を呵つて二人の夫持たすも世界の表向無理な親じやとかんならず恨んでたもんな諦めてと膝に抱上抱きしめて聲を忍びの泣じやくりチヽお道理でござります、さりながらかふして居ては兩方に念が殘る、久松めは今直に在所へ連て歸りましよ、チヽソリヤよい思案じやが待て下され、常と違ふて大三十日とかふいふ内モウ元日今逝すもどうやら氣がかりもふ一日二日にめかりもあるまい、春早々迎ひにござれ且那殿へも譯いふて暇もわしが貰ふておこ、いか樣なア且那樣の耳へも入れず、連ていぬにもマア不躾そんならきつう更けぬ内、ハイお暇申しましよと立上りしがイヤ申し壓狀づくめになつて手を切つた中まだ生々しいナ、此二人、畜ば格別夜通しの大晦日御家内ヽ草臥て一しきりは睡さなる、もし其間にナ申し、どふも此儘では置かれませぬ不遠慮なれど藏の鍵おかしなされて下さりませ、夜の明るまで藏の内で久松は番さします、そふして置て歸りませれば此胸がくどふもたまりませぬ、なるほどそふじや遠慮はいらぬソレ藏へ連ていかつしやれ、ハイ左樣なら直にお暇年明けたらば早々にお家樣何にも口へは出ませぬ、お禮はくかうと伏拜みヽ久松連て中庭から藏へ急ぐは假の牢、口には思ひ桐のとう、脊筋の紋の見へるまで見送るお染が手を引て居間へ這入れば九つの鐘かうくと轟かす、胸も板樣そうくと忍び出たる娘氣は戀路の闇のくらまぎれ、心は先へ飛石のつめたさこはさ、ふるはれて膝もわなくやうくとさぐり寄たる藏の前久松そこにか、つめたかろ嘸寒かろといふ聲も齒の根も合ぬふるい聲、内にもそれと戀しさの顏差し出せど窓の網あやも涙の聲ひそめ逢たかつたお染樣今生のあひ納め、今一度お顏が見たけれど、心に任せぬ今宵の闇是まで忍び逢よさは、月夜を恨み闇の夜よ指をかぞへて待た報ひ、かはす詞も暇乞宵に見た夢の内、自害して死だのは、もふ魂は飛び出たしらせでかなござりましよ諄ながらお前はながらへ後弔ふてといふ聲も咽喉につまつてむせ返るお染は窓に延上りチヽ道理じやくはいのふ、何の生て居られふぞ

わしとても親々の心に背く夫結びふり捨て山家屋に轡いたとて人の口、アレアノ山家やの嫁を見い可愛そふに久松が思ひ詰めて死だのを見捨て直に嫁入は大身代の山家やで榮耀がしたさぢや、皆慾じや、厚皮頰な女ぢやと大阪中に指さゝれ人に憎まれ笑はれて人交はりがなろかいのふ、生恥をさらそふよりいとしいそなたと一時に死で未來の契り樂しみ必ず呵つてたもんなと、くどき歎くぞ道理なる、アゝコレ聲が高い、アレ佛前にも日那の聲お勤めが始まつたアノお聲が聞き　め、長々お世話になつた上恩を仇なる此しだら御赦されて下さりませお染樣スリヤぞふいふても御一所にサイノ〳〵どふも生ては居られぬはいの、御尤でござります其お腹では、なるほど生ては居られますまい、エゝ悲しい事を言出してたもる、五月こせば人の形二人が仲の奔走子、可愛や因果な腹に宿つて月日の光りも見ず、闇から闇に迷ふと思ひや身ふしが碎けていぢらしいはいの〳〵チゝそふでござります、其子ばかりかお前も、そなたも此世の名殘は眞の闇、所隔て死ぬる共未來は必ず一つ蓮、チゝ連立て參りますと内と外とに園原や、有とは見へて聲ばかり今を限りの暇乞、佛前には親太郎兵衛看經の聲、殊勝なり、アレ〳〵久松夜明けも近いか元朝のお勤め、これからが白骨のお文樣、そなたやわしや腹な子の未來の引導聽聞しや、それ人間の浮生なる相をつら〳〵觀ずるに、おほよそはかなきものは此世の始中終幻の如くなる一期なり、お染樣お聞きなされませアノお文に違ひはないアゝ思へば夢の一期でござりましたな、朝は紅顏あつて夕には白骨となれる身なり、既に無常の風來りぬれば則ち二つの眼忽ちに閉一つの息長く絶ぬれば紅顏空しく變じて桃李の粧ひを失ひぬる時は六親眷屬集つて歎き悲しめ共更に其甲斐あるべからず、さてしもあるべき事ならねばとて、野外に送て夜半の煙りとなし、果ぬれば只白骨のみぞ殘れり、嘸あの通りに死だあとでは爺樣かゝ樣の歎き悲しみ今見る樣でおいとしはいコレ申し不孝を赦して下さんせへ、早く後生の一大事を心にかけて阿彌陀佛を深く賴み參らせて念佛申べき者なり、穴

賢〳〵言合されど二人共是が此世のお別れと、わつと泣出す其中にも今死ぬる身の偽りを誠と思ひ親父様、寒かろけれど夜明まで此藏に居てくれい旦那に隱して、夜明にはお家が出して下さるはづ、二日の朝は迎ひにくるといそ〳〵としていなしやつたが、死骸を在所へつれていて嘘や恨の諍と思へば悲しい〳〵と窓にくひ付泣居たる、斯くとはしらず坪の内、何やら物音氣づかひと障子ぐはらりと親太郎兵衛、そこに立て居るは誰じや、アイわたくしでござります、フウム〜お染か、此寒いに何して居るサ、是はなアノチ〜それ〳〵餘り炬燵の火がきつうて上氣したさかいで爰へ醒しに、フムウそれでそこに居るか、アイそんならマアちよつと爰へこい〳〵ハテサテ爰へこいふにしる通り先度のもや〳〵から、内外の者や嬢が手前、子に甘いと言はれふかと思ひ常住こはい顔してゐれど、心の内ではおりや何にも呵つて居やせぬぞよ、案じな〳〵が我もむちやくちやと山家屋へいくはいやぢやそふなけれど、コリヤ義理のある嫁入、言いでも合點であろ、何かはおいて、媒が兩方の町のお年寄、今更變改しては此お主の顔も立ず本家を粗末にすると言はれては太郎兵衛、人中へ顔出しがならぬ、われも時分の娘じやもの、惚れ者もあろ、こそ〳〵とやつた事もあろ、それぢやて〜呵りやせぬ、けれ共こふした譯じや程に、何もかも東堀へ流して、さつぱりと嫁入してくれ、アー同じ男を持すなら好た者に添はしはせいで、むごい親じやと恨んでくれなよ、イヤモ恨む分は何ぼ恨んでも憎んでも構やせぬが、一筋な子供心で呼もない事やどして、薗八節とやらの道行に語られる樣になつたらば、おりやモウ泣死にかな、するであろ、ナ、呑込だか、得心したか今御前で戴いた白骨のお文は元朝と灰寄とに戴く段、あの通りじや程に生て居る間が花じや、死で仕廻へば美しい其顔も、はでな形も只白骨のみぞ殘れり、必ず〻アノお文樣を灰寄讀さぬ樣にしてくれよとこぼす涙は身に熟湯、只アイアイ〳〵とばかりにて延紙のかず〳〵泣つくす、サア〳〵七つでもあろふ、おれはそろ〳〵禮拵へ、稲でもつめと手をひか

れ、鷺鷥の片羽の別れ路や泣音立れどふり袖に包む涙に脇寒く胸は冷せど是非もなく件ひ内へ。

（床本）質店の段（後）

入にけり、いつの間にかは忍び入、善六が頻かぶり、藏の引戸の錠前をめつき〳〵とこぢ放す、折から來かゝる銀清兵衛、ものをも言はず飛かゝり、首筋つかんで、どうど引すへ盜人捕へた、提灯と、呼はる聲に家内の上下、弓張提燭どつさくさ、母のお勝走り出で、チヽコレ清兵衛殿お染が自害しましたはいのふ、と聞て清兵衛じたんだ踏み、エヽ手延にしたが殘念〳〵嫁入て來次第、其形で直に野崎へ久松と夫婦にせふと思ふたも、後手になつたか口惜しや、が又久松を入置し此藏の内も氣がかりと、戸を押開きすかし見てヤア久松も自害した、アヽ可愛やと腰も拔け泣は難波の河千鳥浮名を流す追善さあはれを殘す角屋敷盡せぬ筆に傳へけり。

四條河原の段

竹本　大隅太夫
鶴澤　道　八

人形

仲買勘造　吉田文之助
横淵勘左衛門　吉田玉幸
井筒屋傳兵衛　吉田玉松
廻しの久八　吉田玉市

『それや聞えませぬ傳兵衛さん』で有名なこの淨瑠璃はおしゆん傳兵衛の心中を主材としたもので、元文三年十一月十六日の朝京都聖護院の森に於て發見された吳服屋井筒屋傳兵衛と先斗町近江屋の抱へお俊との情死事件と、同じ頃京の公卿侍と所司代の下部とも四條顏見世芝居の歸途喧嘩刄傷に及びし一件と、孝子として表彰された猿廻しの丹後屋佐七の話とを取合せ佐七を與次兵衛に作りてお俊の兄として構想したものです。天明五年五月江戸肥前座に書下

近頃河原の達引

四條河原の段
堀川猿廻の段

され、爲川宗輔、筒川半二、奈河七五三助の合作でありますが、これより先き豊竹八重太夫が天明二年道頓堀中の芝居で語つてゐます。この堀川は全曲の中の卷になつてゐます。

（床本）

四條河原の段

名に高き四條河原も冬されば川風寒く吹すさび往來も涙の石走る、水音高く夜は猶いとしん〳〵と物すごく降雨よりも我胸の戀路にくらむ官左衛門尻引からげ高足駄指釜の横しぶき勘藏引つれのつさ〳〵川邊に茂る柳影、傍り見廻し立とまり、イヤナニ勘藏、曾頃祇園の社内にて出入の町人傳兵衛めを饗金をもつて一杯くはせ、彼も手代萬八と、その方も働きにて街取たる三百兩、分口取らし

た其後はいかゞ致した、イヤモ其時はやばな仕事、ごふやら斯やら言くろめ、ひやいな所を漸〳〵遁れ萬八とこの勘藏分口の金せしめたれど、昨日今日まで影隠しぶら付て居たればモウ根太切、か爰で逢たは惠方の神申し旦那久し振しや、何ぞ味い事はごんせぬかいのふチ〻有共〳〵今宵此刑で待伏するは外でもなく日外より紛失せし飛日川の茶入此度將軍家より所望に依て倶吟味に及びし所彼傳兵衛奴が今宵四ツまでに尋れ出そふと請合しは先達某が密に盗み取し事、どうやら氣收つたアノ毛二才今宵此所へ釣出し人しれずばらしてしまい、行衛知ざるお俊めを尋れ出して身が女房何とよい魂膽で有ふがなと、語るを聞て仲買勘藏横手を打て、ヤ、さつてもシタリ出來た〳〵フハ〻〻〻併あいつもちつくり惚のあるやつ今にもうせたらこな樣一人此勘藏も倶に加勢を、ム〻ナニサ〳〵たかのしれた素町人、餘人を賴むに及ばぬ事、それよりは、まづ其方は是より直に引返し、邪魔になる久入めをぶち放しお俊の有所を尋れ捜し引かたげて立退くれよ、チツト其くらいの事は朝飯仕事、モシお氣づかひなされますな、ム〻出かしたういやつ、と當座の褒美と投やる包み、おつと合點して、やつたと、慾と惡とを仲買勘藏川端さして走り行く、後に横淵したり顔、腰の大だらすらりとぬき、寢及合して打點頭、鞘に納めて待ぞ共しらぬ井筒屋傳兵衛は龜山のお昼敷より急御用とのしらせを聞き、雨をしのぎの辻駕にて急ぐ道筋、井筒屋としるしの提灯打落せば、驚り仰天、駕舁共、こりやたまらぬと駕打捨いづく共なく逃て行く、駕の内には駕きながら、何事やらんと垂引上げ飛で出たる傳兵衛がそれと見るより聲をかけ、ヤア何者なれば此狼籍、ム〻ウ聞へた往來の人を惱して剝取をする盗賊よな、ヤア盗賊とは慮外千萬コリヤ其方が出入の屋敷御勘定役の官左衛門樣だと聞て傳兵衛小腰をかゞめ、ハ〻コレハ〳〵雨夜の事なり、あいろは見へす、存じ寄れば只今の無禮、眞平御免下さりませ、さりながら其又官左衛門樣が何故有で、此所にヤ、お尋れ申も、暇おしくお屋敷よりの急御用御免とばかり、傳兵衛はよらずさ

はらず行んとする、アヽコリヤ待〳〵其屋敷の急用と言たのは某が拵へことだはい、エヽサア其方をこへ釣出したは、別儀でもないたかがわれを打殺しお俊を女房にする心だ、まだそればかりでない、館の重寶飛日川の茶入を某が盗み取し事氣取つたはうぬが不運、生置ては後日の妨け、觀念ひろげ、と拔かくるかはして、利脇しつかと取、コリヤ何となされます、マヽヽお待なされませ〳〵ハテ扨マアお待なされませモ其大切ないお國の重寶、あなたが所持なさるゝことやら町人風情の私しが知ふやふもござりませれども、あなたの口より茶入の事、仰有こそもつけの幸ひなければならぬ飛日川其茶入故若殿樣、御身の上にかゝはる大事、お家のかきん、今此時何卒お戻し下さりませ、あなたに御難のかゝらぬやう、身に引受けて、納まりの仕樣もやうは私が心一つにござりますれば、こゝの道理を聞分て茶入をお渡し下されかし、賴みまするとひたすらに、土に額をすり付て、詞を黑す井筒屋が心の内ぞせつなけれ、元來邪智の官左衛門何か心にうちうなづきムヽヤ、コリヤ、尤、武士は當て碎けとやら、わけて涙もろい官左衛門だ、戻しにくい所なれど、左程までに其方がお國を思ふしほらしさ、志にめんじ、飛日川、只今汝に渡してくれん、スリヤ私に其茶入を、チヽ價の金は金千兩耳を揃へて請取ふはい、エヽム、成程いかにも承知致しました、シタが途中の儀なれば、金子は明日、アイヤベん〳〵とそりやならぬ、じやと申て大まいの金、持合をふやうもなし、明早朝には間違なふ急度持參致しませふ、イヤ成らぬ、それまで茶入は私に、いやだ、お預けなされて下さりませ、エヽやかましいはい、其やうに廻り違い事、此官左衛門きらひだはい、コリヤ身が堤詰にしたお俊めを影になり、日向に成、盗みくらひし素丁稚め、コリヤ官左衛門が武士は捨つたはいやい、サヽヽお道理でござります〳〵モそれおつしやられますと私がお詫の申樣もござりませぬ、モ此上は私を打なりと縛なりとあなたの胸の晴るやう御存分に遊ばして、茶入はお渡しくたさりませコレ申ごふぞ此儀を御了簡と胸をす

へたる傳兵衛が心ぞ思ひやられたり官左衛門はしたり顔、ムゝスリヤ何か、踏れてもぶたれても申分はないと申かイヤモ茶入さへお戻し下されば、たとへ此身はどふなつてもムゝゝゝハゝゝゝムゝゝゝゝハゝゝゝゝコリヤそふなくては叶はぬ筈じやてハゝゝゝ然らば汝が申す通りそろ〳〵料治にかゝろふかい、まづどたまからはり倒さふかアイヤ尻こぶたからがよからふか、ムゝンじたい此生じらけたしやつ頻を見る度事に、カアプウ胸が悪いはい、ヤイ粕賣女のおしゆんめさよふも〳〵ちゝくり合、長の年月某を大馬鹿者に仕おつたな、つもり〳〵し意趣ばらし胴性肖に覺へよ、アイタゝゝこりやあんまり、何だ〳〵其つら何だ口惜ひか無念なか、ムイヤ左樣ではござりませねど、あんまり嚴しいお手の内サこれで、あなたのお顔も立ませふどふぞ茶入を私にチゝ戻してやらふ請取と言つゝ茶入追取て、せき留石へ投付れば微塵になつて飛日川、碎け散こそ是非なけれ、ヤゝゝゝ是程までに、ことを分、あまつさへ、泥脚にかゝる大事の塲所と思ひ手向ひもせず勘忍の二字を守つて詞を下げ賴むもお家大切さ、殿の浮沈におよぶ茶入、打碎たる大惡無道コリヤモウ絕体絕命じやはい、ナニ絕命だ、ムゝン絕命なれやわりや、どふするチゝ眞斯すると、切付る、こなたも强氣のめつた斬、うけつ流しつ、戰ひしがいかがはしけん官左衛門、石に躓きよろ〳〵よろ、すきを見すましエイヤツト脊骨をかけて切下げられよろめく所をのつかゝり、思ひ知やと、とゞめの刀鞘も通れと突つらぬき一息ほつと突出すかれ、チあの鐘の音は清水寺、冥途へ導く諸行無常チゝそふじや〳〵と身ぐろい、覺悟極めし其處へ息もすた〳〵、廻しの久八、すかし眺めてヤア若旦那じやござりませぬか、チゝ久八、よい所へよふ來てたもつた、餘儀ない譯で官左衛門を切殺し、とても生ては居られぬ此身、親人への不孝の段々お詫申てお後へもよきにとばかり後言さし、手に取脇差久八押へて、アゝコレマアおまちなされませ、あぶない〳〵〳〵ハテ扨マア氣をしづめて若旦那私が言事とつくりと聞しやりませ、斯言ふことも有ふかと氣

堀川猿廻しの段

切　竹本津太夫
　　鶴澤綱造
ツレ（鶴澤綱右衛門
　　鶴澤寛市）

人形

弟子おつる　吉田文之助
與次郎母　吉田玉七
猿廻し與次郎　吉田榮三
娘お俊　吉田文五郎
井筒屋傳兵衛　吉田玉松

はいらて共、どつさくさエ〜外の事でもござりませぬが、彼紛失の茶入の事、サア其茶入を官左衛門がたつた今、打碎て仕舞おつたはい、サ〜宜敷ござります〳〵ハテお氣遣ひなされますな、そりやお前樣、眞かいな贋物でござりまつせ、エ〜サア宵にひらりと見付し勘藏合點行じと付廻し窺ふ中に案のぜふ、お俊樣を引かたげ、かけ行く所をひつとらへ、しめ上て樣子を聞ば官左衛門に賴まれたと、いちぶしゞゆの咄し誠の茶入はお前の手代行方知ぬ萬八に預けてあると勘藏めが苦しさ餘つてさつきの白狀、モウにつくひやつは萬八め、モシ若旦那、切腹とは惡い御合點短氣は損氣、わるい事は申ませぬ〳〵片時も早ふ飛日川取戻すが上分別、ササ〜ちやつとお出なされませ〳〵ム〜スリヤあの茶入は贋物かエ〜忝い、さりながら惡人なれ共お家の家來切殺せし此傳兵衛所詮遁れぬ天の網サア其網も何もかも身に引受る此久八、後かまはずと若旦那サお早ふお立なされませ〳〵コレマ宵からのどさくさかマ髪もばら〳〵アゝ何ぞ仕樣はムゝマア〳〵是なりと、手拭につゝむ涙の頰かむり、人の見ぬまにサア早ふぜひに〳〵と久八がすゝめの詞傳兵衛は心濟れど立あがり行つ戻りつ踏迷ふ、疵持足のはかどらず心せきくる早瀨川、更け行く空も定めなき戀と無常をうば玉の闇を力に落て行く。

（床本）堀川猿廻しの段（切）

おなじ都も世につれて、田舎が増の薄煙、堀川邊に住居して、後家の操も立つ月日、琴三味線の指南屋も、合の手もつれ氣もつれを、保養がてらの藥風呂、あふぐも我を潤園扇、目さへ不自由な暮しなり 詞おつる樣嘸ぞ待遠にあらうなア、そしてなにやらのさらへであつた、オヽそれ鳥邊山、アリヤじたい心中事、會にでも彈くのなら、お前は女の方、お繁さんは男の方、かけ合にうたふがよいぞへ、ドレ〳〵お繁さんのかわりに、私と掛合ひにうたひませうと、老手彈手もしほらしき二上リウタ女肌には白無垢や、上に紫藤の紋中着緋紗綾に黑繻子の帶、年は十七初花の、雨にしほるゝ立姿、男も肌は白小袖にて、黑き繻子に色淺黃裏

二十一期の色盛りをば、戀といふ字に身を捨小舟、どこへ取付く島とてもなし、鳥邊の山はそなたぞと、死に行く身の後髪、彈く三味線は祇園町、茶屋のやま衆か色酒に、亂れて遊ぶ騷ぎ合ひ 合あの面白さを見る時は 詞アヽイエ〳〵それではさんと聲にしほれがないはいな 歌あの面白さを見る時はと、かう諷ひなされ アイ、あの面白さを見る時は、 詞オツトヨシ〳〵染殿そなたと某が、去年の初秋七夕の、座敷踊をかこつけて、忍び逢ふたる事思ひ出す 詞オヽ今日はマアそこ迄〳〵、精も出る程あつて、きつう手も廻り出したモウ〳〵どこで彈きなさつても恥かしい事はないぞへと、聞いて笑顏の片男波、又明日といふ汐に、お鶴は立つて歸りける。母を大事と油斷なき、見過ぎも輕き小風呂敷、肩に乘せたる猿廻し、戻りはいつも日暮前與次郎はいきせき門口から 詞母者人〳〵今戻つたぞや、オヽ兄戻りやつたか嘸ぞひもじかろ、茶も湧いてある、膳もそこにして置いたぞやオヽ德よ今戻つたかよ、今朝から小猿めが親を尋てやかましい、コレ兄や、ちやつと傍へやつてやりやいのアイ〳〵左樣でござんしよとも、ソレちやつと乳を呑してやりおれ。イヤノウ與次郎、そなたが孝行にしてたもるに付け、私が此長々の病も、いつ本服する事であらうと思へば、勞の上に猶勞れる、僅な弟子衆の餘情や我身の働きで、此養生がマヽなるものかと思へば藥も毒となり、母ではな

うて子供の爲には苛責の鬼と思はるゝ、鬼は冥途にあるものを、つれなの老の命やと、身を悔みたるむせび泣き、哀にも又いぢらしゝ詞アヽコレ母者人、ソリヤマア何を云はんすぞいの、其樣にみそやかな身代ぢやと思はしやるか、此間弟子入した米やの息子殿から長々お袋の煩ひで、嘔かし勝手が惡からうと、云ふて陽か花かと申すやうな、上白米の仕送り、店々の旦那衆から、何なと用があるなら云ふておこせ若し、中養生さしますなら、幸な隱居所もある程にと、云ふて來るお方もあり、羔饕餮頭生魚、近所隣へ早々すそわけもしられば、鯛赤貝の類は横町の鮓屋へ卸賣、モコレ案じる事は微塵もないぞや、それにまだ〳〵まだ氣の毒なは、此家主が此家を居なりに、買てくれぬかと頼まれる。ヤレいやゝの〳〵アヽあた世話な家持よりは金持が、遙ましであらうかと、母に案じをかけさせぬ、贅八百さへ一貫に、たらぬ節季の事譯を、云ふ下稽古やこれなるべし。嘘とは知れど老の身は、子にしたがふがならひぞと機嫌よげに打ちうなづき詞ヤヽそれ聞いて落付きましたが落付ぬは娘が事、此間も親方が、おしゆんを預けに來ていはしやるには、コレ傳兵衛殿と云ふ客の事で、ちと内に置かれぬ事がある、醫へ傳兵衛が尋ねてござろ共、おしゆんが歸つて居る事は包み隱さればならぬぞやと、くれ〳〵も云しやつたぞや、サアわしも其入譯を聞た故、おしゆんが心根を思はずしらず涙か、ドレ灯を燈そと棚のすみこそ〳〵出す行燈の、灯かげも漏るゝ暖簾ごし詞おしゆん、コレおしゆん、アイと返事もしほ〳〵と思ひなやみし顏形、マア〳〵爰へと小聲になり詞門の戸はかけてある、見る人も聞く人もない、方々で噂を聞くに、此間の川原の喧嘩、殺し人はサ殺して人はわが身の客の傳兵衛殿なれど大恩請けた久八と云ふ者が、代りに捕られて往つたげなが其場に落てあつた小柄があの傳兵衛殿が御屋敷から、拜領した小柄ぢや故天命遁れず御詮議最中、なれども其夜から傳兵衛の行衛も知れず、其あひ方の女郎はおしゆんと云ふ事をお上にもよう御存じで、親方の方へもいろ〳〵と、御詮議あれど、これ

も行衛が知れぬと云ひ切つて、今もめてあの最中ぢやと、取々の噂評判、おりやもう聞く度毎にびくゝすること、聞くほどせまるおしゆんが胸詞其夜の起りも皆私故、どこにどうしてござるやら心元なき逢ひたさも、云ふに云はれぬ塲の品、いかゞと胸もふさがりし、母は一途に娘の可愛さ、詞コレ〳〵おしゆん案じる事はないわいの、併し突詰た男氣で、ひよつとこちの家へ來て、又物ざんまいでも仕やせまいかと、四五日は夜の目もろくに、モ寢られぬまゝの物案じ、世間にたんとある格なん心中やなどしてくれたら、此母は目かいは見えず、兄はアレあの樣な臆病者もしもの事があつたらば、跡で母はどうせうぞ、袖乞物貰ひに歩いても、そりやもう一つもいとませぬけれどもそなたの体に凶事でもあつたら、おりやもう直ぐに死んでしまふぞや、若い氣に前後思はず、義理ぢや、イヤ人の落目を見捨てはと、詰らぬ義理を立抜いて、年寄の此母につらい目見せてたもんなやと、可愛さ餘る親心、アゝ南無阿彌陀佛も涙聲、兄も俱々ヤコレおしゆん詞今母の云はるゝ通り、何の義理もへちまもいらぬ、どいてしまへばあかの他人ぢや又おれも氣にかゝつて、好なものさへ咽へ通らぬわいのう、母者人の氣休め、おれが腹助けぢやと思ふて、どいてたもヤコレ賴む〳〵と正直一遍、母の心と兄の詞、勿体ないと思へども、切るに切られぬ胸の内所詮死なねばならぬ身の、此塲を拔けて其上でと、心一つに思案を極め詞母樣、兄樣お二人の、お詞よう合點いたしました殊に又傳兵衛さん、ツイ一通りで逢つた客、深い半太夫サハリ譯でもないわいなア、併し勤のならひにて、人の落目を見捨ると、里の恥辱とするわいな、とても末の詰らぬ事わしや得心してをりまする詞ちよつと逢つて其上で憎う惡うもない樣に、得心をさせまして品よう譯の立つ樣に詞イヤ〳〵其樣に譯立てると云やつても、あつちに得心せぬ時は、それ〳〵行がけの駄賃馬で踏殺し、アゝイヤ〳〵無理殺しにせうもしれぬわいの、コリヤめつたにはかみ合されぬわいの、おゝ兄の云やる通りぢや、そなたに怪我でもあつては、傳兵衛殿とやらも難

儀思ひ切るのがあつちの爲、わが身に心引されては、つい捕へられるはしれた事、退狀をやつたらそなたの事も思切つてオヽ切るとも〳〵、遠い國でも影を隱したら、身を遁れまいものでもないわいの。コレ〳〵むづかしかろ共ツイ一筆、兄硯箱取てやりやサヽ早う〳〵と母と兄、詞にいなも、泣顏を隱す硯の海山と、重る思ひのべ紙に、筆の立どの跡や先、涙に墨のにじみがちなる胸の内、書殘すは露知らぬ、與次郎は傍から詞コレノコレ其樣に長たらしう書ずとも、ツイどきますと書いてもすみさうな事ぢや。イヤノウ書いたものは後々迄も殘る物、男の去狀と同じ事、とつくりと譯の分る樣に書いてやるがよいぞや。アイ此狀にとつくりと、御合點の行樣に、兄さん、此文お前からお渡しなされて。オツトよし〳〵此狀さへあれば千人力ぢやマア〳〵母者人も落付しやれ、とやかく云ふ内九ツ前お前も奥でサヽヽもうねやんせ、オヽそれ〳〵今夜こそゆつくりと、心よう寢るであらう兄もそなたもそこに寢やと、奥底もなき隔てをば、押明てこそ入にける詞サアおしゆん、こちらも爰で往生いたそ、アイとおしゆんが俱々に、暫し此世をかり蒲團、薄き親子の契りやと、枕に傳ふ露涙、夢の浮世と諦めて、更け行く鐘も哀れ添ふ、頃しも師走十五夜の、月は冴れど胸の闇、過ぎし別の言ひかはし、死なば一緒と傳兵衛が、忍ぶ姿のしよんぼりと、彳む軒は目覺えの、慥に爰と門の戸へ、さはる相圖の咳拂ひ、聞くにおしゆんが飛び立つ思ひ、上げる枕も打はづす、與次郎は傍に高鼾心も俱に行燈の、灯ふき消さし足に心急ぐ程明兼れる、戸口の繫金表にも詞おしゆんぢやないか、傳兵衛さん、よう逢ひに來て下さんしたと、云ふ聲寢耳に與次郎が、惚り起ると明くる門の口、妹が姿もくら紛れ、とらへる袖のふりあはせ、おしゆんと心得傳兵衛を、無理に引込取違へ戸口を内からぴつしやり引立て詞そりやこそつれに來おつたぞ、おしゆん必ず外へ出まいぞや、戸口におれが押へて居る、ヤア門に居るは傳兵衛ぢや、おのれを入れてよいものかと、いふもがたゞ胴ぶるい、詞コレナア兄樣わしや表に居るわいな何

ぢや表に居るわいなア、ヤア其聾色置てくれ、そんな事喰ふおれぢやないわい、母者人、母者人、傳兵衛がおしゆんを殺しに來た故、今表へたて出した、おれ一人では手が廻らぬこなたも加勢して下され、加勢〳〵〳〵と、うろ〳〵〳〵うろたへ驚き母親も、何ぢや〳〵〳〵傳兵衛の加勢、ムゝまだ外に同類でもあるのかと、探り寄つたる傳兵衛が傍、詞コレ〳〵おしゆん、顔ふ事はない兄や母が付いて居る、マア氣を鎮めやと撫でさする、脊の手ざはり合點行かず詞コレ〳〵與次郎、どうやらこりや娘ではない樣なわいのヤアくらがり紛れに材木が紛れ込みやせぬかや、こなたつかまへて居て下されやと、探る手先に火打箱、がち〳〵ふるふ附木の光り、詞シヤアコレヤ妹ぢやない傳兵衛じや、お袋兄御、エゝ面目もない此姿さ猶も小隅に屈み居る。コリヤヤイコリヤ其樣にしほ〳〵として見せて、おいらを欺して、おしゆんを突うとするのか、其手はくはぬと懷より、一通取出しこは〴〵ながら傍に寄り、詞コリヤ〳〵傳兵衛、おしゆんと我と手が切れぬと、科人のわれじやによつて、妹迄離儀する、それでさつきに妹に得心さして、どき狀を書かしてあれば、コレこれを見い、これぢやによつてモウ〳〵〳〵おしゆんが方に殘心氣は離れてあるわいムゝスリヤおしゆんが其退狀をサアどき狀ぢやエゝ其心とは知らず云ひはした、詞を誠と思ふて、迷ふて來たが無念なわい、口惜いと齒を喰しぼる男泣恨を聞くも隔たる戸口心はさう、じやないじやくり詞オゝ嘸腹が立う道理ぢや〳〵、マア〳〵とつくりと氣を鎭めて、退狀を見て下さんせいなア、オゝそれでよい、長う物いやんな屑が出るぞ屑がコリヤヤイ〳〵傳兵衛おれが讀んで聞かしたうてもな皆目おれはナニアノソレオ、祐筆ぢやわい、サアサア早うと封じめ切り突付られて目に溜る、涙を拂ひ、詞ナニ書置の事ヤア何ぢや、書置ぢやコレ〳〵兄正直な、惚りする事はないわいな、そなたは無筆わしや盲、書置じやと讀違へ、うろたへさして門口へ出で娘を存分にせうとのたくらみ、ハアハゝゝそんな嘘は喰ませぬサアサアほんまに讀ましやれ〳〵

コレコレ與次郎、表の娘に氣を付けて、門の戸を明きやんなや。オヽ呑込んで居ろ、爰にはおれが、ヘヽヘばり付いて居ろわい、サア〳〵〳〵早う讀みやい、ものこそよう書かれ聞く事は祐、ヤナニ無筆じやないわい、サア讀だ〳〵〳〵。エ誠にこれ迄の御養育、海山にも譬へがたき親の御恩、殊更不自由なる御身の上、何卒首尾よう勤を遁れ、世を榮に過させまし候はゞ、せめて少しの御恩報じ孝行の片はしにもなり候はんとそれのみ朝夕祈り〳〵處〳〵、二世迄と云ひ交し〳〵傳兵衛樣、思はぬ此度の御身の難ゝ、根を尋ねば皆われ故に候へば、今さら見捨て候ては、女ゝ道立ち申さず候、不孝とは思ひながら、俱に覺悟を極め〳〵。オヽ母者人、どうやら風がかはつて來た樣な、サイノウわしも胸がとき〳〵とサア其踊をちやつと讀んで下され下され。エヽ俱に覺悟を極め〳〵、先程傳兵衛樣へ退狀と申して認めしは此事申上度きまゝ退狀と偽り書き殘し〳〵。何事も〳〵、前世よりの定り事と、御諦め下され候、申上げたき數々〳〵、筆にもつくしがたく候へ共、心せくまゝ申入れ〳〵オヽ〳〵さてはさうした心かと驚く傳兵衛親子はうろ〳〵詞エヽ氣づかひな、コレ兄や姫を家へ、早う〳〵と母があせれば與次郎も、戸口明ければ走りよる妹を無理に四人が、顔見合して涸息の、涙はさらにわかちなく、何と詞も傳兵衛、泣く目を拭ひ詞一旦いひかはした詞を立て、俱に死なうと覺悟して、義理を立てぬくそなたの貞節忘れはせぬ嬉しいぞや思ひ廻せば廻す程、我こそ死なで叶はぬ身、そなたは科のない身の上、俱に死んではお一人の歎き、命ながらへなき跡の、とひ弔ひを賴むぞと詞にわつと泣き出し、そりや聞えませぬ傳兵衛さん、お詞無理とは思はれど、そも逢ひかゝる始めより、末の末迄云ひかはし、互に胸を明しあひ、何の遠慮も内證の、世話しられても恩にきぬ、ほんに女夫と思ふ物大事の〳〵夫の難儀、命の際にふり捨て、女の道が立つ物か、不孝共惡人共、思ひあきらめコレ申し、一緒に死なして下さんせと隙せし剃刀取直す、詞マヽヽヽまて待おれやい〳〵〳〵コリヤやい、これで死ぬると命がない

ぞよ、コリヤまあ何の事ぢや、さんと分らん樣になつてきたわい、殺しに來たと思ふた傳兵衛殿より、今ではわれの方が手強うなつたぞよ、コリヤマアどうしたらよからうぞと、云ふもおろ〳〵母親も詞かいさうぢや〳〵、我が子が可愛〳〵と子故の闇に脇ひら見ず、これまでおしゆんがお世話になつた、恩も義理も辨へず、一圖に中を引別けうと、思ふた母は義理知らず、賤しい勤する身でも、女の道を立て通す、涙、手前面目ない、そなたの心に恥入つて、何事もいひません、傳兵衛樣と一緒にの、コレ死出の道連れしやいのう、したがこれ申し傳兵衛樣、定めて親御樣達もござりませうが、親の心といふ物は、人間はおろか、たとへ鳥類畜類でも、子の可愛さにかはりはないもの、おしゆん傳兵衛と云はす氣か、もしやお前も死なしやつたと親御樣が聞かしやつたら、悲しうて〳〵此世に殘つて居る氣はあるまい何國いかなる國の果、山の奥にも身を忍び、どうぞ遁れて下さりませ、涙が心に恥入つて、天にも地にもかけがへない、可愛我子を心中に合點してやる親心愛の道理を聞分けて、コレ拜みます賴みますと、手を合はしたる親心子故迷ふ闇の闇、二人は何と詞さへ涙に涙結はるゝ、血筋のわかれ次郎も、涙ゝ雨の古布子、袖喰ひぱりしやくり泣き、アヽ傳兵衛樣の泣しやるも道理ぢや〳〵、道理々々と云ふて居ては、れつからはつからいつ迄も分ぬ道理ぢや詞がコレ傳兵衛樣、母者人が今の詞、御合點が參りましたか、エコリヤ我も得心してくれたか合點がいたか、得心してくれたか、合點がいたか、サヽいヽヽ合點したらばどうぞ此場を、立退く分別、併し其形では人目に立つ、京の町を放れる迄、此編笠で顏をかくし、幸ひの猿廻しまめで二人が末長う、目出たう女夫になりとげる、門出の祝ひに此與次郎が、お初德兵衛が祝言の壽、此方衆も生別れの盃、イヤ〳〵祝言の盃と祝ひ諷ふも聲びくに有田カタ お徒はめでたやな合ヒヤウシ 智入姿ものつしりと〳〵詞コレ去りとは〳〵ノウあろかいな、さんな又あろかいな詞オヽ德兵衛樣ござんせ、餘りこな樣が來やうが遲いによつて、お初樣

は蘇眞亦にして、腹立て居やんすわいのうコレお初様、智様が盃をしたいといのう、機嫌直して盃を、戴かんせ、コレ〳〵〳〵いたゞくノウ盃を、さんな又あろかいな、詞ヤコレ〳〵コレ智様、足で盃をさすはあんまりつれない、それでは嫁御様が戴かんせぬわいのう、ひぞらずとほんまにさしてやらんせ、さうぢや〳〵〳〵そこでお初がいたゞいた物ぢやコレいたゞくのう盃を、さんな又あろかいなヒヤウシコレ嫁御の寝癖もころりとせい〳〵、ナコレエあろかいなさんな又あろかいな詞コレ〳〵智様餘りつれなうさんすによつて、おしゆんヤアノ何嫁御様が起さんせぬわいの、そこらでちよつと起したり〳〵、エ、コリヤ、コリヤヤイ、コリヤ、去りとは〳〵ノウあろかいなさんな又あろかいな、ヒヤウシ起たら互ひに抱付きやれ、オヽそれで機嫌が直つたぞ、エヽヽヽあろかいなさんな又あろかいな、くるりと返つて立たりな、立てくれ、コレ〳〵コレ立しやませ、序でに日和を見てたもれ、アヽよい女房ぢやに〳〵ノウあろかいな、なさんな又あろかいなヒヤウシ日和を見たらば落ちてたも〳〵、オヽさうぢや〳〵〳〵、お猿は目出たや目出たやなサヽヽヽヽさり　此家を猿廻し、まさる目出たう何時迄も、命まつたう仕てたもと、目は見えねども見送る母、詞も此世で聞き納め、心の内の暇乞ひ明日の噂と形ふりも、やつす姿の女夫づれ、名を繪草紙に聖護院、森をあてどに三重へたどり行く。

寢女房染分手綱

道中双六の段
重の井子別の段

双六の段

竹本相生太夫
竹本津の子太夫
ツレ（野澤歌助　澤清二郎）
ツレ（鶴澤福太郎　澤綱治）
竹本鏡太夫
竹本さの太夫
ツレ（鶴澤友衛門　野澤吉左衛）
ツレ（竹澤團二郎　澤友駒）

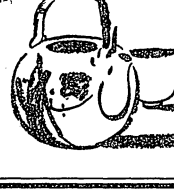
この淨瑠璃は寶暦元年二月竹本座に掛けられたのが始めて全十三段から成立つてゐます。この段は十段目で双六の段であるが重の井子別れで通つてゐます。作者は吉田冠子、三好松洛であります。この曲は大近松の「待夜小室節」（丹波與作）を改作したものであります。書下しの時は竹本大隅掾が語つてゐます。この子別れの段の趣向は丹波の藩主由留木家の家老伊達與三兵衛の悴與作が竹村定之進の娘重の井と通じて與之助といふ子供を生けたが、惡者の讒言で故國を走り、馬追に零落します。重の井は再び主家へ歸參が叶ひ、乳人となつて姫君のお供で江戸へ發足しやうとして、姫君のお遊びにと呼入れた馬士が意外にも一子の與之助であつたので、一旦は親子の名乘をしたが、世間體を恥ぢて、涙を隱して秩を別つといふ筋であります、歌舞伎にも上演されて有名なものです。

（床本）道中双六の段

立年月も追り來て由留木殿のお湯殿子調の姫早十二歳に成賜へば兼ての約束にて東の高家入間殿へ御婚禮極り奮から取る花嫁御けふ旅立の御供揃へ上下ざめき賑はへり。刻限は已の上刻との定めにて御迎ひのおも家老本田彌三左衛門敷獻の盃

足もとはよろ〳〵と猩々緋の滝中羽織白い所は髪斗りきんかあたまに顔色もしゆちんの立付けりゝしげに何と〳〵お供廻りが揃つたらお先手から乘出し召れ目出度折からと申し殊に女中のお供だ、少しの事は見遁しにして置召され、あつとこたへてさいりやう共サア御立と催す所に奥より女中聲々にマー待つしやれ〳〵氣の毒やお姫様關東へいく事はいやじやや〳〵とやんちや斗り御意なされお袋様も殿様もたらしつしかつゝ遊ばさ共ごふでもいやじやとおむつかりお乳の人の重の非殿色々と申されても夫程江戸へいきたくば乳母斗りつきおれとお乳の人の脊中をとん〳〵とぶたしやんして御機嫌がそこれましたといふところへ眉泣はがし姫君げ江戸も東もこちやいやじやおれはいかぬと泣く〳〵走り出で賜へば武士衆も下々も御門にかけ出で家老の外男ぎれこそなかりけれ、お乳の人色をかへコレ申お姫様下々の子供さへ九ツ十では物のきゝわけござりまず、江戸へござれば入る間殿の惣領嫁御とかしづかれるお身ぢやそやお乳の育ての難になれば女でこそあれ乳母は腹を切られればならぬサアよいお子じやお輿にめせとおどしてもそやしてもいや〳〵皆のだましぢやなんの東がよい所こしもと共がうたふを聞きやサアみんな爰へ出ていつもの歌をうたへ〳〵とせめ賜へばおとぎ小性のぐわんぜなし十二三なが手をそろへ山も見へざるかりそめに江戸三界へいかんしていつ戻らんす事じややら殺して置ていかんせのはなちはやらじと泣きければアおきや〳〵お大名の宮仕へ琴の組でも諷はいで誰に習ふて端手な歌姫君などにおしやんな必ず置いて貰ふとお乳の人のふ機嫌さ本田もあまり詮方なく申お姫様あれは人の口てんがふ花のお江戸は京まさり淺草上野の花盛り又さかい町木挽町のでんつく〳〵でこの坊ふいやつとこゝゐなどゝ切合を見せましよふ道中の面白い事富士の山と申す天迄とゞく山を御目にかけまする先年身共が御結納の御使者に參つた時はお姫様はまだ二つ何卒御婚礼のお迎ひに參りたいと申たが光陰矢の如しと今年丁度十一年其様にちやんやおつしやるまで長生を致さそとは存ぜなんだ、早ふお輿に

召せませいと力一ぱいすかしてもいやく江戸へはいきはせぬどうでもいやじやと泣賜へばお乳も今はあぐみはてどふしてよからふ御家老もあきれてこそはいゝけれけれお中居の若衆は門外より走り入りナゝお乳の人様おもしろい事がござります十チ斗りのそりさげのちつぽけな馬方が道中双六とやら東海道の繪をひろげあぢな事して遊びます御機嫌直しにお目にかけなされませチゝよふぞ氣が付た夫は聞き及んだ道中の繪を見せましお心もうつる爲馬士でも子供は大事ないお赦しぢや其丁稚に持て參れとよふでおじや心得ましたと門に連立來る馬方が口肌ぬいでさはき髪御側近くも小遠慮に樣先に裾足してヤレ〳〵あか樣達はあつたぼこしゆもないほふばい共をかけごくに道中双六打つてくつの錢程しとこませうと思ふたに人呼迫つて何でやる、ハレヤレ〳〵きつく乘つしやれ馬やういとぞつかふどなる扱てりかうな野良じやな船頭馬かたお乳の人こちもそちらと同じ事シテ年はいくつ名は何といふぞ年は今年十一五つの年から馬おふて一代若衆に成らずにはへぬきの危者じや所で名はどれんじよの三吉さてもよい名じや聞けば道中双六が有るげな腰元衆も打て見や姫様も遊ばせサア三吉も爰へこい苦しつないと呼ければあいといふより慮外をも返り短かきせるの煙立まじりたる女中の傍そぐはぬ樣に見へざるはさすが童の一德と繪を取出し双六をみな打交り遊ばゝこれ〳〵御らんぜうたしやんせ是こそ五十三次を居ながらあゆむいざ膝栗毛馬はいしい道中すご六なむ諸併ふんしんと書いた六字を六角のさいは櫻木花のみやこをまん中に思ひ〳〵の印を置いてさらばこちから打出の濱大津へ三里爰でやば


大及御池橋
茶道具
電話新町二六二二番

重の井子別れの段

切　豊竹駒太夫
竹澤團六

人形

調　姫　吉田玉丸
乳母　重の井　吉田榮三
本田八十左衛門　桐竹門造
馬方三吉　吉田榮三郎
腰元お福　桐竹紋太郎
踊子　吉田兵次
踊子　桐竹紋司
宰領　吉田文作
宰領　吉田光之助

せの船頭が出舟召せ〳〵たび人の乘おくれじとゞさ草津お姫様より先づ姥が餅一ト口二タ口みな口ごぢやう踊りこゑ坂へこすのもさい次第さいをふれ〳〵振るやすゞかを後にさかればまけまいとせきにせきより龜山にたばこ火うちの石やくしおつとくは名の舟渡し所々の名物かふておあしつく〳〵突手まり子にひいふう三いよふ府中杖尻にすつとん〳〵とんと打つたる沖津波松原晴るゝ膏薬かふて月をすひ出せきよみ寺由井蒲原や吉原の花の蒲燒名物の鰻の肌へ沼波の宿三嶋こゆれば箱根へ三里さいめしだい關こゆる悪いめうでは手はんを取に元の京へ立歸るがつてんかチヽのみこんだ小田原うゐらふ大磯平塚藤澤のさはともなしに双六のさいさきもよし門出よし道中早めてとつかはといそぐ程が谷神奈川越エ川崎を越エ品川こへまつ先がけのお姫様一ばんがちに勝つ色の花のお江戸につき賜ふ一のうらは双六の幸有り悦び有りなぐさみ有ける道中とどつと興にぞ入賜ふ。

（床本）

重の井子別れの段

〳〵傍の衆にはやされて、稚心の姫君。かうおもしろい東とは、今迄おれは知らなんだ、サア〳〵行かう早やいかう。ヤアござらうとおつしやるか、そりやめでたいわ〳〵、又もや御意の變らぬ間に、行列揃へと立ちさはぐ。お乳の人は勇みをなしそんならま一度、大殿様お袋様とお別盃、これも馬子殿おかげじや、で

かいた〳〵、そちには禮いふ、褒美やる、そこに待ちや〳〵とさゞめき渡り、奥にお供し入にけり。馬士はつひに見ぬ金の間をうそうそと、覗き廻れど莚の外、踏もならはぬ備後表詞エー此座敷はぎやうにすべつて歩かれぬ、大名の家よりも、こつちの内がけつこでござる、と獨言して居たりけり、お乳の人は大高に、菓子さま〳〵文庫にもり入れ。詞どれ〳〵三吉、そこにかそちは健氣者じや道中双六お目にかけ、それ故に姫君樣、お江戸へござると御意なさるゝお上にも御機嫌、是は御前のお菓子有難ういたゞきや、お錢三筋、買いたい物買ひやゝ殊にそちは通しじやげな、道中すがらも用あらば、お乳の人の重の井に逢はふと云や見れば見るほどよい子やぢに、馬士させる親の身は、よく〳〵であらうといふ懇の詞のすゑ三吉つく〳〵聞きすまし。詞由留木殿の御内お乳の人の重の井樣とはお前かそんなりやおれが母樣と、抱き付けば。アゝこは慮外な、詞俺が母樣とは馬士の子は持たぬ、さもぎ放せば、武者ぶり付き引退くれば縋り付き。詞何んのない事申しませう。わしが親はお前の昔の連合、此御家中にて番頭伊達の興作、其の子は私、こな樣の腹から出た、興之助はわしじやわいの父樣は殿樣のお氣にちがふて、國をお出でなされたは、少さい時で覺えれど、沓掛の乳母が話には、詞母樣も離別とやらで、殿樣に御奉公、こなたは乳母が養育し、父さんに逢はせたう思へ共、甲斐もない、母樣の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、重の井さまと尋ねよと懇にをしへて乳母はおれが五つの年、久しう痰を患ふて鳥羽の祭の餅が咽につまつたやら、つひ死んでのけました、詞乳母の子の一平は父樣

現代的

廣告は廣告社に限る

大阪市南區御堂筋跡町九

齋部太郎經營

電話戎三七五六番

を尋ねに行き、在所の衆が養ふて漸々馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする、コレ守袋を見やしやんせ、何んの嘘を申しませう、お前の子に紛れない外に望みは何にもない、父様を尋れ出し一日なりとも三人一所に居て下され見事沓も打ちまする、此草鞋もわしが作つた、晝は馬を追ふて、夜は沓打、草鞋、つくり、父様母様養ひませう、父様と一に居て下され拜みまする母様と、取つき抱きつき泣き居たり。お乳ははつと氣も亂れ見れば見る程我子の輿之助、守り袋も覺えあり、飛び付いて懐に抱き入れたく氣はせれども、アツア大事の御奉公、養ひ君のお名の瑾、偽はつて呵らふか、イヤ可愛げにさうもなるまい、マアちよつと抱きたい、アゝどうせうと百千色の憂涙、二つの目にはたもちかれ、むせび沈みて居たりしが、いやいや我子ながらもさかしい者、偽つても眞こせず母を心のきたない者と蔑しまるゝも情なし譯を語つて合點させ耽しめてかへさんものと涙拭ふて氣をしづめ、爰へ來い輿之助と引寄せて兩手を取り、詞まで扱も大きうなりやつたの、とても成人せうならば侍らしうなぜ尋常にも育てぬぞ、顔の道具手足まで母はかうは産み付けぬ、美しい黒髪を此やうに剃りさげて、手足は山のこけ猿じや、ほんに氏より育ちぞと、又さめ〴〵と泣きけるが詞コレ物をよう合點しや、腹から産んだは産んだれども今では子でも母でもない、淺ましう成下つたな、嫌ふていふではさら〳〵ない、爰の譯をよう聞きや、詞母はもと御前樣の御奉公人、與作殿は奥家老の御子息たがひに若木の戀風に、すれつもつれつ、一夜が二夜と度重なり、そなたを懐胎此の事御上へ聞へては、父も母も御成

お電話の用は
南
5番・701番・711番
(長)132番・5291番
西630番

のまさなみ
南一温泉料理

四ツ橋

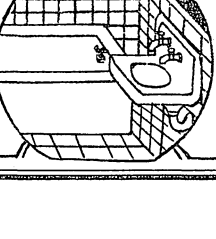
早春の御宴會はづま

温か・感じいい

南一温泉料理へ

敗にあふ故に、詞病氣と僞り乳母が所で産落し、育て貰ふ其中に、情なや八平次といふ者の所爲にて父樣は御追放、此母が恪氣から不義の事あらはれ既に御成敗に極りしを、わしが爲には父樣、そなたの爲には祖父樣の定之進樣、勿體ないわしにかはつての御切腹、お姫樣の乳ばなれといひ立て奥家老の御子息二番と下座にさがらぬ人、其時母も一所に退けば、もつとも夫婦の道は立てども、目に餘つたお家の御恩、誰何時の世に報ぜん、殘つて恩を報じてくれと、父樣の斷り故、第一は男のため、夫婦の義理を忠義にかへて、飽かぬ離別をしたわいの、詞男の子は幼うても、御勘氣の末氣つかひな、與作が子とばしいはしやくなサア早う御門へ出や、いかなる因果な生れ性、現在我子に馬追させ、男の行衛も知らぬ身が、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乗つたとて、是が何になること、聲を忍びて泣くばかり、子は生れつき賢くて、聞きわけある程猶泣入り悲しい話を聞きました、さりながら常に乳母が申したは、乳兄弟の事なれば、母樣にさへ逢ふたらば、父樣も出世なさるゝ由、御訴訟なされてくだされかしと、いへばちやつと口をおさへ。アレ〳〵勿體ない、詞其乳兄弟は言はぬ事、姫君樣の關東へ養子嫁子にお下り、高いもひくいも姫ごぜは大事の物先は他人の世間體、三吉といふ馬追が、乳兄弟に有るなどと、どう妨げにならうやら蟻の穴から堤も崩る、輕いやうでも重い事もそ〳〵いふて人も聞く、先づ早う出てくれと、泣く〳〵いへば三吉。詞アゝ母樣あんまり遠慮過ぎました、先づ言ふて見て下され。また言をるか聞分ない、夫の事我子の事、母に如才があるものか、合點のわる

化粧石鹸
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水淨化裝置
特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
新一橋
岡部商會
電話新町一六一二六九六
阪急夙川
岡部商會支店
電話西宮一九七六

い聞分けなと、制する中に奥よりも、詞お乳の人どこにぞ、御前から召しますと呼ばはれば、アレ聞きや、人がくる出てたもと手を取つて引出だす。不憫や三吉しく〳〵涙嫉冠りして目をかくし、沓見まつべて腰につけ、見すぼらしげな後影コリヤま一度こちらむきや、山川で怪我しやんな雨風雪ふり夜道には腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで、煩らにぬ様にしてたも、毒な物くはずに腹痲疹の用心しや、可愛の形やいた〳〵しや、千三百石の代取が、何の罰ぞ咎めぞと、式臺の段階子に身を投げ伏して歎きしが懐中の有合ふ一歩十三、巾沙に包み是嗜みに持つて居やと、涙ながらに渡さるゝ。三吉見かへり恨めしげに母でも子でもないならば病うと死なうと要らぬお構ひ、其一歩もいらぬ馬士こそすれ伊達の興作が惣領じや母でもない、他人に金貰ふ筈かないエゝ胴慾な母様覺えて居さつしやれと、わつと泣き出す其有様、母は魂消えいりて、養君、お家の御恩思はずばさて一人子を手放して何のやらうぞ、奉公の身の淺ましやと、もだえ焦れて歎きける時に奥口ざゞめいて、早御立と姫君の、御輿かき上げ行列立ち、お乳の人の乗物を、ひら付にこそかき寄せけれ、お乳はさあらぬ顔付して、姫君のお伽に、最前の馬士を此の乗物に引つけ、お慰みにうたはしや。畏つたと宰領ども。詞コリヤそこな、自然囃め諷ひおらうとぎごつなく、詞ヤアこいつはほへをるか、何じやこりやいま〳〵と、握拳二つ三つ、いたぎながら泣聲に、坂は照る〳〵鈴鹿はくもる、土山間の間の土山雨が降る降る雨よりも親子の涙

贈用
侍
お給
みの
げは
是非
文樂堂
堂錄商標 美香あめ
文泉人形繪入雜大小
御菓子
おかき
あめ
おこし
果富貴寄
文泉豆
文泉せんべい
味噌せんべい
結び昆布
銘菓珍味色々
文樂座前
文樂堂
電南六六九〇

四ツ橋畔
より

一月の文樂座
消息日誌

△一日
初春興行の初日開演。

△三日
舞臺中繼、茶屋場、八時より放送
由良之助（津）
おかる（土佐）
平右衛門（古靱）

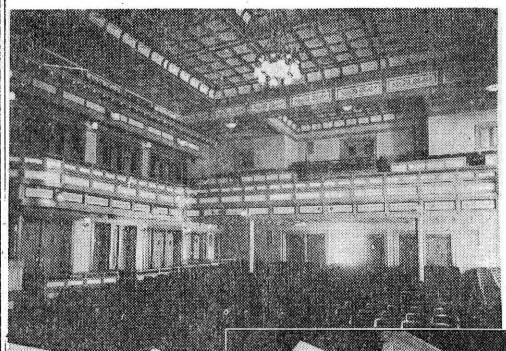
△十日
吉例文樂會開催

△二十日
京都帝大御在學中の東伏見伯御來臨

△二十二日
好成績裡に打上げ

割烹
宗しあ
木綿橋西詰
電話櫻川二三九三番
新設椅子席は
季節一品料理

四ツ橋文樂座グラフ



觀覽席より舞臺を望む

文樂座外觀全景

二階正面休憩所と特別廊下入口

・設備斷然東洋第一！

アイス・スケート場

A（大）リンク 二百坪
B（小）リンク 百坪

ウインター・スポーツの王座！

歲末から新春への絶好の行樂！

特に初心のお方を歡迎いたします

毎日 午前十時 至午後十一時
日曜、祭日に限り午前九時より

・一般外來入口 北側電車通り

・御觀劇の方は幕間の時間を利用して御自由にお出入りして戴けます。

文限 **歌舞伎座** アイススケート場

一點焦點の觸感感代近代する旋迴を上盤玻璃

・結氷狀態は最も良好・

中座 二月一日初日

松竹家庭劇（初お目見得公演）

第一 鳶に油揚 一場
第二 小判掴出し譚 二場
第三 新譯宵庚申 三場 一幕
第四 渦中に立つ花嫁 一幕
第五 赤い家、青い家 一幕

浪花座 二月一日初日

更生新聲劇
毎日 ヒル十二時 ヨル五時半
二回開演

第一 國定忠次 四幕 六場
第二 ほくろの署長さん 一幕
第三 仁義夜話 三幕

角座 一日初日

吉花菱女連と民謠座喜劇座
おどり、きげき、まんざる

松竹座 一日切封

ドロテア・ウイーク嬢主演
制服の處女

近日切封

グーリイ・クーパ龍氏主演
百萬圓貰つたら

朝日座 三日切封

田中絹代・大日方傳主演
伊豆の踊子
市川右太衛門主演
無宿深編笠

近日切封

栗島すみ子主演
孔雀船
高田舟吉主演
春秋やぐら双六

辨天座 三日切封

鈴木澄子・木村正二郎主演
お宮と貫一郎 戀の双六
高田徐入社第一回主演
街の青空

近日切封

入江たか子・岡田時彦主演
瀧の白糸
鈴木澄子・河津清三郎主演
妖魔の繪暦

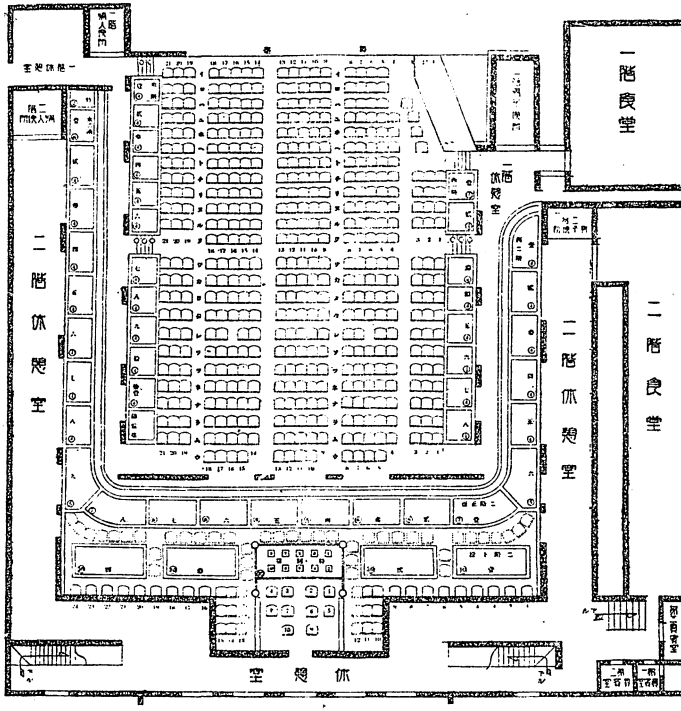
・三日初日・

東京新派總動員に藝術座加入出演

ヒルの部
第一 父と母 二幕
第二 二筋道昔語 四場
第三 紙芝居 三場
第四 裏切 一幕

ヨルの部
第一 上陸第一歩 五景
第二 親 一幕
第三 明眸禍 六幕

文樂座御席場御案内



御、觀、覽、料、の外一切御不要の上大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出來、またお出入が御自由です。

前、賣、切、符、壹等お座席・壹等椅子席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命の節お呼出しの電話は

南四七一一番で御座ゐます

切・符・賣・場・右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

尚多人數樣お團体樣のお申込も御相談いたします。

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひますとお仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙室を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します御座席では御遠慮下さい

御携帯品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帯願ひます。

お場席券は

各自に御持ち下さいまし、切符に一枚づゝ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行屆の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は場内にて

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所で御自由にお飲み下さい。

出演者

寫眞撮影は絶對にお斷りいたします。

當座御使用の

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

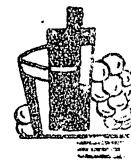
御休憩の間は

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ゐますから御使用下さい。

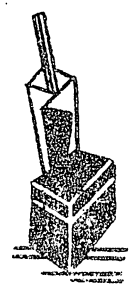
四ツ橋 文樂座
前寶切符專用電話南四七一一番
電話南 七四〇八番
三七八八番

文樂座食堂御案内



洋食堂（西館階上）

スピード・ディナー（御定食）一、五〇
スープ　時價
フライ（海老、魚）四、〇〇
オムレツ　四、〇〇
コロッケー　四、〇〇
ビーフカツレツ　四、〇〇
チキンカツレツ　四、〇〇
ビーフステーキ（五分間）五、五〇
カレーライス　三、五〇
チキンライス　四、〇〇
コールドチキン　五、五〇
コールドハム　五、五〇
コールドビーフ　五、五〇
マカロニーチース　四、〇〇
アスパラガス　四、〇〇
サンドウイッチ　二、〇〇
ソーダ水（特製）
文樂スペシアル
ビーフステーキ



和食堂（西館階下）

吸付辨當　一、〇〇〇
御食事（五品御飯香物）二、〇〇〇
親子丼　五、〇〇〇
にぎり壽司　五、〇〇〇
ちらし壽司　五、〇〇〇
雀壽司　五、〇〇〇
鐵火卷　三、五〇〇
赤だし　三、五〇
お吸物　二、五〇
菊正宗　三、五〇
特アサヒビール　五、〇〇
ダイヤレモン　三、〇〇
ソーダ水（普通）一、五〇
紅茶　一、〇〇
ケーキ　一、〇〇
アイスクリーム　二、〇〇

洋酒お茶

酒場（西館階上）

文樂カクテル　七、〇〇
マンハッタンカクテル　六、〇〇
ドライマテニイ　六、〇〇
アプサンフラッペ　一、九〇〇
ミリオンダラー　一、九〇〇
ミリオネア　一、九〇〇
ウイスキー　各種七〇
コニヤック　各種
リキュール　各種
チーズ　各種
ソーダビスケット　二〇

南一温泉料理經營

文樂座の御宴會を

席子椅等一……は覽觀御
食洋・食和……は食事御
入本床さ割役……附　番
影撮別特人形をゐれ…記念撮影

（御日お持参の出來る樣速致成し致す）

金四圓五十錢也　御一名樣分

御申込は廿人樣以上なるだけ五日前に願ます

お電話は南四七壹壹番へ御申附け下さい

落付た氣分・春と倶に朗かな
大阪でたつた一つの宴會劇場

昭和八年一月廿一日印刷
昭和八年二月一日發行
發行人　大阪・四ツ橋文樂座　大塚貞三
編輯　成山桂三
印刷者　大阪市西區土佐堀通一丁目　永井太三郎
印刷所　大阪市西區土佐堀通一丁目　永井日英堂印刷所